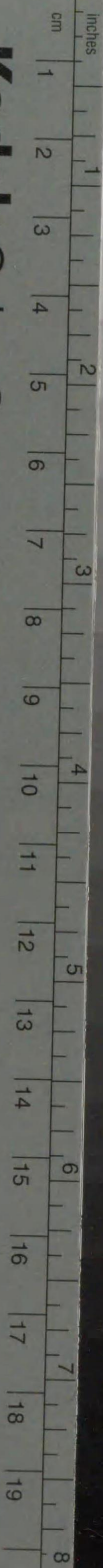


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

- A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

3/Color

Black



© Kodak, 2007 TM: Kodak

503
84

563-81イ



1200600033670

3. 8. 14

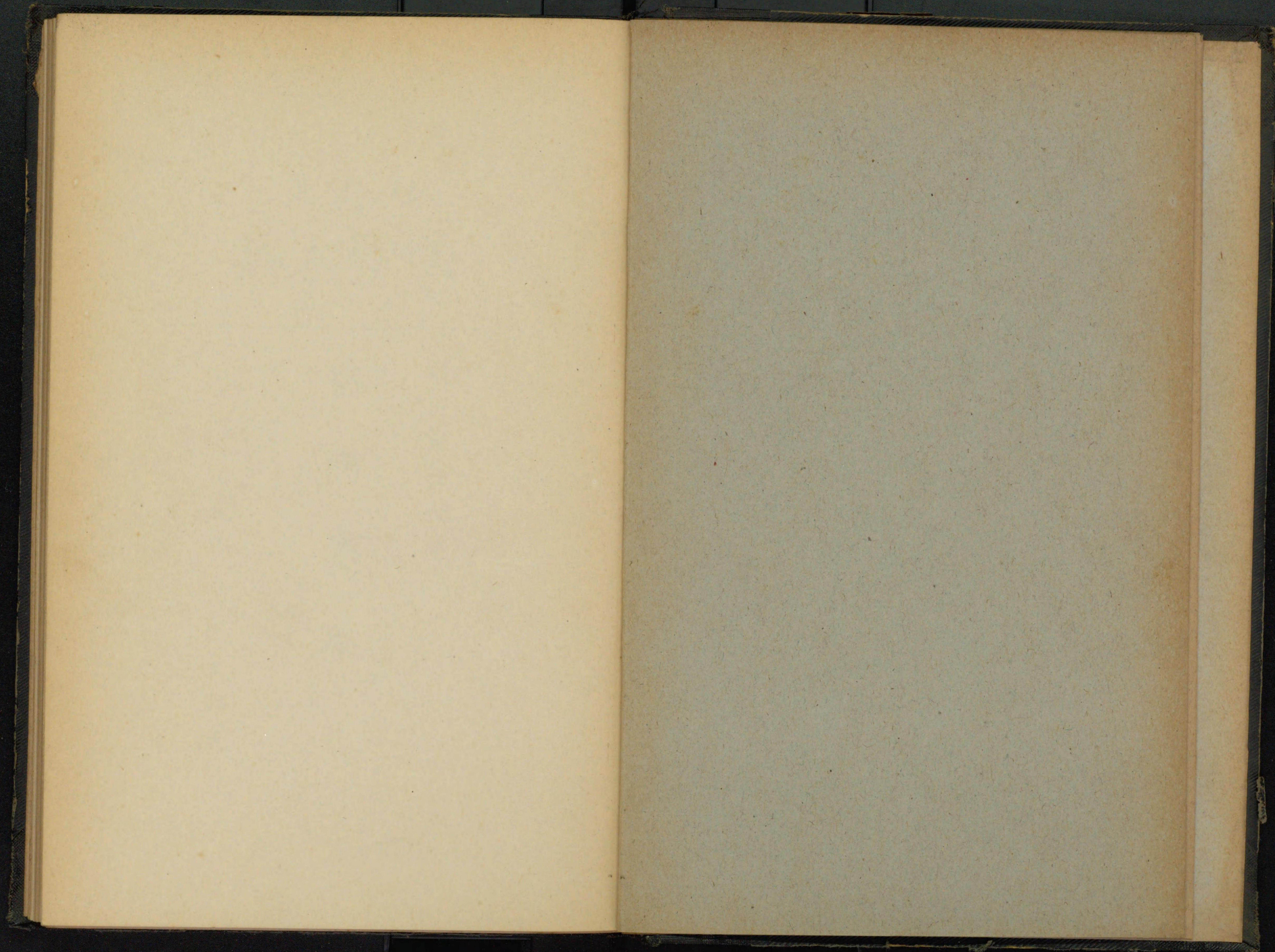
系大學美スプリ

冊分三第

學美間空

譯全松末垣稻

版藏館文同京東





系大 美大

冊分三第

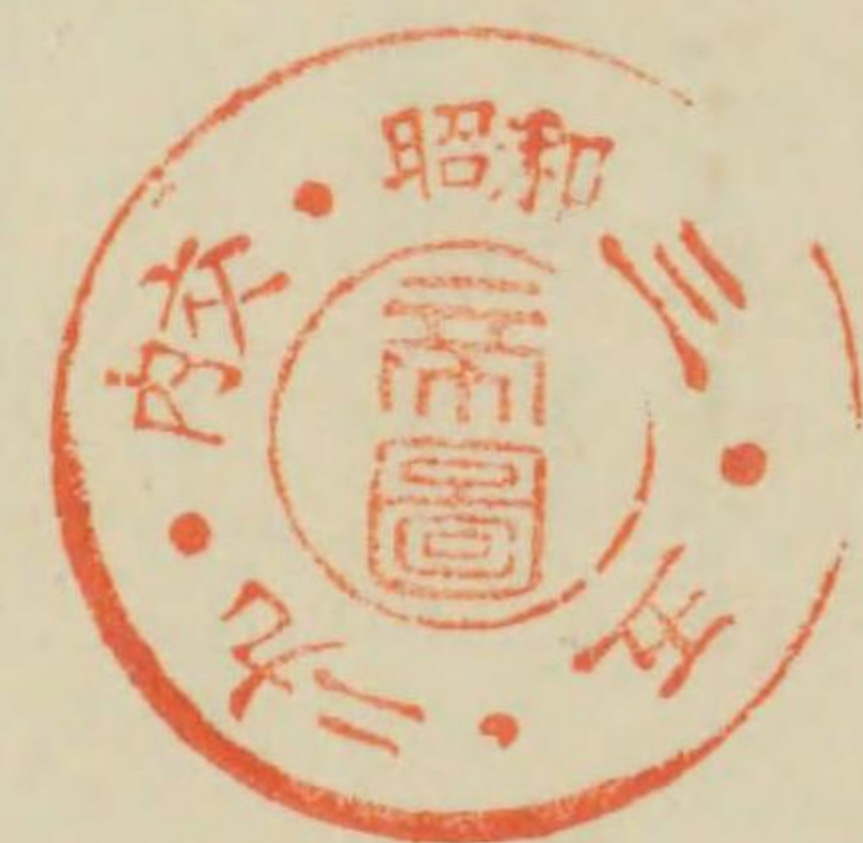
稻垣末松全譯

空間美學

東京

株式會社

同文館藏版



目次

第一章 美的器械學……………二九五

一 幾何學的の線(二九五) 二 運動の帶有者としての線(二九七) 三 快感の根據としての器械的合法性(三〇〇) 四 「器械的説明」の可能(三〇二) 五 線の器械的説明と再認識(三〇七) 六 繼起的把握と感情移入(三二〇) 七 經驗的感情移入への移行(三二三) 八 力などの感情移入(三二八)

第二章 單一なる形的美學に對する細説……………三三二

一 一般の統覺的感情移入と合經驗的の感情移入との相互關涉(三三二) 二 線の中に於ける自由と強制(三三五) 三 線の自由と自然物體の自由(三三八) 四 線の發生の特殊の條件(三三九) 五 分派の動機(三四〇) 六 謂ゆる「近代的」の線(三四三) 七 屈折せる線(三四四) 八 三次元的の空間(三四六)

第三章 型相化作用……………三四四

一 總説(三四四) 二 型相化の可能(三四六) 三 總括的の型相化(三四八) 四 型相化の發展(三五〇)

第四章 空間的形の統合と分員……………三五二

一 官能の分化(三五二) 二 働作と反對的働作(三五五) 三 相互より發生する所の諸官能(三五七) 四 同時の共同的働き(三六一) 五 相互的の働き(三六三)

第五章 均衡と運動……………三六五

目次

一 空間的の均齊(三五) 二 均齊的分員(三六) 三 系列的分員(三七) 四 質的に分化された系列的分員(三七) 五 均齊と均衡(三四) 六 運動に於ける均衡、弾力性(三六) 七 能働的の弾力性と受働的の弾力性(三〇) 八 以上の外の曲線的の形(三三) 九 鳴り込みと鳴り止みの動機(三三) 一〇 謂ふ所の「句讀點」(三六)



第三篇 空間美學

第一章 美的器械學

一 幾何學的の線

常に、現實界に於て吾人に對接するやうな人間身體が、吾人に對して活躍的にあるのみならず、更に吾人は、同士の生活又は同種類なる生活といふものをば、かの身體から離解せられ、それ自體として、吾人に對接する時の身體的形に對しても、結合せしむる。かくて、人間の身體を再生する所の圖畫といふものも亦、よしや之が、活躍的の身體の形相と本質的に異なるとはいへ、尙吾人に對して活躍的の物を表現するのである。此の如き事實關係といふものは、若しも吾人にして、人間身體の形なるものが、本來形そのものとして、或は此の如き特定なる形として感情移入の對象であるといふ事を考慮するならば、可解的になるのである。

次に之と同一の方法に於て、物といふものゝ形も、たとひそれが、其の物から離解せられようとも、尙物の生活の帶有者となる。之とて吾人に可解的にある。之が爲には、吾人は特に、物の空間的形とか、その共存の方法とか、特定の形の運動とかは、それ自體として、自然界中に於て因果的に結合されてあるといふ事に想到すべきである。さうして斯く想到するといふと、かゝる因果的連絡の爲に物の中に存在するやうに見ゆる所の力及び働

作といふものが、空間的存在及び運動そのものに迄、結合されて現出せざるを得ないのである。

されど今の論究上特に重要であるのは、次の事である。それは即ち、吾人は、自然界中に於て、常に物の甲若くは乙の範圍中に於て、因果的連絡を發見するのみならず、更に、此の中に於て、一般の空間的現象の最も普遍なる合法性をも發見するといふ事である。さうして此の種の合法性なるものは、此の如き最も普遍なる合法性としては、物の興へられたる具體的の形をば、その特殊なる帶所有者として有しない。之に反し、之は單に成分として物の中に包有されてある所の「抽象的の」形に迄、結合されてある。一例を擧げると、落下法則といふものは純然たる直線中に於て實現せられ、波動といふものは、純然たる幾何學的の波線中に於て實現せらるゝが如くあるのである。

さうして其の此の如くあるといふ事は、かゝる「抽象的」の形も亦、生活を以て充實するやうに見ゆるに至らしむるのである。同時に又、此の種の生活は、彼れが如き合法性の性質に一致して、それ自體に、普遍抽象的のものとなる。換言すれば、之は一般的にして器械的なる自然的力の働である事になるのである。

ところが、此の如く述べ來るといふと、吾人は、幾何學的形の美學に迄移行行くのである。蓋し、幾何學的の形なるものは、普遍の自然合法性、或は彼れが如き一般の器械的力の働きといふものが、よりて以て現出し、さうして純然たる觀察に供せらるゝ所の抽象的の形であるからである。

されど右の如く述べればとて、是單に問題の豫決をなしたに過ぎない。吾人は先第一に、吾人が茲に就いて語

らうとして居る所の幾何學的の形をば、他様に規定せねばならぬ。かくて吾人は言明するのである。曰く、此の幾何學的の形とは、直接に吾人に對接するが如き自然物の形を再生し居る所の形ではない。之は、此の如き再生的の形に反對して、自由に作造された形である。

併し此のやうな言明に對して吾人は直に附加する。曰く、今此の所では、かゝる形が具體的の自然物の形でないといふことが、吾人の關心すべき事柄ではなく、之に反し、此の形が自然物中に於て起生すると否とに拘はらず、之が美的に重要に現出すると。吾人は曾て人間の身體の形の事に就いて述べた。之が、人間の身體に附屬するが故に美であつたり醜であつたりすると。而も此の如くある事に反對して、「幾何學的」の形なるものは、それ自體として、即ちかゝる特定の形として、積極的又は消極的の價値を有するのである。

然らば、此の如き形は、孰れよりして其の美的意義を取得するか。何故に、幾何學的の形が美であるであらうか。

二 運動の帶所有者としての線

右の疑問に對する解答は、當該の幾何學的の形にして整正なるものである限りに於ては、單一であるやうに見ゆる。蓋し吾人は言明し得るからである。曰く、整正なる形といふものは、まさしくそれが整正であるが故に美である。一例を擧ぐると、直線は、その方向の同一であるが故に美であり、圓は、到る所同一なる方向變化の故に美であると。

實に吾人は、整正といふ事、詳言すれば同一のもの、同種の復歸といふものは、快感の一の根據であるのを知得する。けれども又、今此の所では、一般的の快感といふものを問題となし居らない。之に反し美的快感なるものを問題となし居る。簡言すると、美といふものを問題となし居るのである。さうして此の如くして、幾何學的の整正そのものが、此の如き美的快感を根據づけるか、又は、之が、他の種類の整正或は合法性といふもの、發表として之を根據づけるかといふ事が、論究さるべき事になる。

直線ABは、延長し、AからB、又はBからA、若くは中央から兩端に迄、展開する。之は、それ／＼吾人の考察の仕方に応じて、此の中の甲若くは乙、若くは丙の展開をする。若し又、此の直線にして垂直線であるならば、之は上方又は下方に展開する。

此の如き語句によりては、吾人は、線といふものに對して運動を歸與し、さうして此の線の中に於て一の運動的働作といふものを實證する。吾人は、よしや線が、明かに全然たる靜止状態に於て存留し、さうして如何なる種類の働作をもそれに於て氣付かしめざるにも拘らず、尙かゝる歸與をなす。

されど吾人は、此の如き語句を用ふる事により、次の如き事を言明する程、矛盾を感じない。それは即ち、數學上の公式に就いて、それが芳香を放つとか、又は、黒い表面或は白い表面を有すると言明するといふ事である之に反し、吾人は、外觀上奇異に聞こえるにも拘はらず、右の語句をば、全然時宜に合ひ自然的のものであると想定する。即ち此の語句は、吾人に取りて十分適當なるものに見ゆるのである。或は又、二三の者は次の如く反對する。曰く、直線中に於て右の如く運動及び空間的働作を語るといふ事は、

單に、その線をば、一次元にしてさうして到る所同一なる方向の形體として特徴づける事になる。此の如くするのは極めて奇怪なる事である。吾人は、如何にして、一の知覺内容をば、その被知覺物の事實的性状に全然異他無縁、否直接に矛盾する所の語句によつて特徴づけるなどの事が能きようや。かくて吾人は、通常、此の如き事を爲さない。即ち吾人は、事柄を轉倒し、さうして被運動物をば、それが靜止し居ると言明する事によつて特徴づけるなどの事は、決して爲さないと。

されど、此の如き反對説は、吾人の直接的意識により、最も的確に反駁せらるゝのである。吾人は前に有意的に言明した。水平線のABが、それ／＼考察の仕方に応じて、AからBに迄、又はBからAに迄、若くは中央から兩端に迄、展開すると。此の際に於て、線といふものは、客觀的には全然同一である。然るに右のやうな言明は異なりたる或るものを意味する。之は、外部的ではなく、之に反し其の内部的本質上、異なりたる線を意味する。即ち、始めの二つの場合に於ては、線は、吾人に對し、内部的に相對せる方向を有する。さうして第三の場合に於ては、之は同時に二重の方向を有する。かくて此の線は、三つの場合の各に於て、それ／＼異なりたる内部的本質を有するのである。

して又、かゝる水平線と原則上異なりたる内部的本質をば、上昇するやうに吾人に對して見ゆる所の垂直線といふものが、有する。更に、此の種の上昇する所の垂直線とは、下降する所の垂直線は、内部的に異なつて居るさうして凡て此等の場合に於て、線といふものが、幾何學上から考察すると、常に同一の線であるといふ事實は内部的本質の右等の如き反對の下には、全然消失する。之は恰も、二個の單語の同一といふものが、その意義の

差異の爲に、全然消失するが如くにあるのである。

されど吾人が線の中に於て發見する所の空間的働作といふものは、二種のを其の中に包有する。その一は運動といふものであつて、他は、その運動により己れを實現し満足せしむる所の行爲なるものである。吾人は先第一に、此の第一の動力に留意して見よう。

由來空間的運動なるものは、器械的の現象であり、その方向は、器械的現象の方向である。ところが、線といふものゝ上述の如き「内部的本質」を確定する所のものは、先第一に、此のやうな器械的現象である。かゝる器械的現象は又、線の方向といふものゝ性質的差異を生ぜしむる。かくて例へば、水平線及び垂直線の方向に於ける差異は、幾何學的の差異ではなくて、器械的の差異である。詳しくいふと、垂直的方向なるものは、重力が働く時に生ずる方向、並に重力に對しての直接なる反對的働きの起る時に生ずる方向であり、水平線なるものは此の兩反對者に對し中性なるものである事になる。

此の如きが故に、器械的のものが、先第一に線の中に存在する。線なるものは、器械的「説明」の對象である線の整正といふ事は、常に幾何學的の整正であるのみならず、更に器械的の合法性である。即ちたゞ一の運動衝動が、直線中に於て、全然自由に、換言すれば、或るものによつて壞亂されたり轉向されたりする事なしに、實現せらるゝのである。

三 快感の根據としての器械的合法性

ところが右の如き器械的の合法性といふものは、線の快感に對して意義を有せねばならぬ。蓋しかゝる合法性も亦、一種の整正であるからである。此の故に、吾人が前に立證したる如くに、整正といふものにして快感を起さしむるならば、此の種の整正も亦快感を起さしめねばならぬ。之を詳言すると、吾人が線の中に於て發見する所の、器械的現象の質的統一性といふものは、快感の根據でなければならぬのである。

されど吾人は直に進んで言明する事が能きる。曰く、彼れが如き器械的の合法性は、快感の一の新奇なる條件として、附加せらるゝのではない。之に反し、之は唯一の條件であると。

世には、建築に於て、半圓或は四分圓の形を有する所の側面圖といふものが語られる。けれども之をより精密に觀察して見ると、此の如き側面線は、何等の半圓でもなければ又四分圓でもない。之に反し、此等の幾何學的に整正なる形とは、著るしく異なつて居る。之を例へていふと、柱に於ける波狀形又は尖小形の「半圓的側面圖」といふものは、扁平にされた半圓、隨つて推出された半圓、或は扁平にされた楕圓、隨つて推出された楕圓として、表現する。次に又、建築上の籃狀弓形といふものを想起して見るがよい。此の籃狀弓形なるものは、右半部と左半部との均齊を別にしては、何等の同種的に復歸する所の形といふ元素を有しない所の線である。隨つて此の線は、右の如き均齊の外に、何等の幾何學上の整正を有しないのである。

とはいふものゝ、凡て右の如き形の中には、器械的の合法性といふものは存在する。此の種の合法性は、此等に於ては、幾何學的整正の代りに、現出して居る。そこで、右の形の中の第二のもの、即ち籃狀弓形といふ線は、半圓形或は楕圓形の運動の法則に基いて經過する所の一の線が、到る所同一にして、點から點迄起生する所の垂

直的の抵抗を受くる場合に發生する。さうして之と同様の方法に於て、柱の基底の種々の半圓的側面圖も發生する。

最後に、一の線の美を根據づける所のものは、幾何學的の整正であるか又は器械的の合法性であるかといふ疑問を決定する爲には、吾人は須らく單一なる實驗をなして見るべきである。かの波線といふものは快感を起さしむる。さうして此の如き快感の所因としては、一には、その中に有する各の山と山との同一、二には各の谷と谷との同一、三には、山と谷との均齊、四には各の山と谷との均齊といふものを擧ぐる事が能きるであらう。

されど此の種の幾何學的整正の元素といふものは、尙増加する事が能きる。即ち吾人は、各の山及び各の谷に對し、半圓の形を與へ得る。随つて下方と上方とに迄、交替的に、開いたる半圓をば相互に移行せしむる。今や前に發生して居つた幾何學的整正といふ元素は殘存し居り、さうして尙此の外に、吾人は一の新しい元素を附加した。それは即ち、各の半圓に於ける恒定不變なる彎曲といふものである。併しながら此の如くして發生した結果といふものは、美的に全然不可能なる線であるのである。

而も何がかゝる不可能を來さしむるかを直に發見する事が能きる。それは即ち、右の如き線は、器械的に不可能であるからである。蓋し各の半圓に於ける運動といふものは、若しもそれが一度開始されたならば、自然に平等一様に進行する。換言すれば、半圓といふものは、圓に迄、完成される。之に反し、此の如き運動は、己れ自身から、反對せる方向の彎曲に迄移行し變化する事は能きぬ。此の如き器械的現象といふものは、是不可解の驚異と謂はざるを得ない。

此の反對に、波線といふものは、統一的なる器械的合法性を表示する。吾人は、かゝる線の中に於て、直線的に進行する所の運動、並に、之に對して垂直なる方向に於ける彈力的搖動といふものを發見する。波線にして若しも全體に於て水平的に進行するならば、その場合には、かゝる搖動は垂直的のものである。詳しくいふと、上方への運動は、いつでもそれ自身の中に、一の彈力的にして隨つて彈力の法則に基いて増加する所の抵抗を受ける。さうして斯かる抵抗は、或る點に於て、上方運動を靜止せしめ、次には同種なる下方運動といふものを發生せしむるのである。

以上の如くあるが故に、一つの線が發生せしむるやうに見ゆる所の統一的の器械的合法性といふものが、その線をして快感を起すに至らしむるのであつて、たとひ此の如き器械的合法性の産物といふものが、幾何學的に整正でなく、之に反し幾何學的整正を消滅せしむるものであるにもせよ、尙かくある。此の逆に、幾何學的整正といふものは、若しもそれが器械的合法性に矛盾する場合には、不快感を起さしむる。さうして此の如くあるよりして歸結せらるゝのは、器械的合法性といふものが、快感不快感を決定する所の動力であるといふ事である。幾何學的整正なるものは、それが此の如き器械的合法性を發表する場合に於てのみ、又之を發表する限りに於てのみ、美的意義を有するのである。

四 「器械的説明」の可能

以上の如くあればとて、器械的合法性自體の單なる存在のみでは、何等の美を根據づける事が能きない。而も

此の如き言明は、次の二種の事を意味する。

第一に、器械的合法性といふものは、常にそれ自體として存在するのみならず、更に吾人に對して、存在せねばならぬ。さうして之は存在するに相違ない。而も吾人の沈思計量する所の悟性に對して存在するのではない。勿論吾人は知得し居る。換言すれば一度此の事に就いて思考した者は知得する。波線といふものが、上に述べたやうな方法に於て發生するといふ事を。之を例へていふと、一の調音又の運動により、その静止状態の外に持來され、附近の空氣に反對してふられ、又かゝる空氣により逆にふり歸さるゝ所の空氣の振動といふものは、波線があちこちに動くやうな方法に於て、あちこちに動くといふ事は、吾人に對し判明して居る。さうして吾人は、自然界に於ける此の種の現象を想起するならば、波線に於ける運動といふものを理解する事が能きる。

さはいふものゝ、是等の考慮といふものは、波線を觀照する際には、吾人の中に通常起生しない。かりに又、かゝる考慮が起生するとするも、之が爲に何等の美的快感といふものは起らない。美的快感なるものは、省察からでなく、之に反し直接なる觀照から、詳言すれば、器械的合法性の現出に關する各の思考なしに、又之に就いての各の悟性的知識なしに、發生もすれば、又發生せねばならぬのである。

勿論吾人は、此の如くあるにも拘はらず、或る意義に於ては、かゝる合法性に關し多少の「知識」を有するに相違ない。けれども斯の種の知識は、吾人が之に關し彼是説明を思案する事なしに存在し得る。即ち器械的合法性なるものは、故意に「知識」を働かさなくとも吾人に對し存在し得るのである。

此の事は、日常の經驗が吾人に證明をする。吾人は、歩行したり、舞踏したり、氷滑をしたりし、さうして特

に此の氷滑の場合に於ては、甚だ複雑なる運動を實行し、而も此の際、確實に均衡を保持する。此等の事をば、吾人は一の規矩即ち法則に違つて遂行する。吾人はかゝる法則を基準となす。けれども法則が言明する所のものに關しては、吾人は何等の意識を有しないのである。

されど凡て此の如くあるにも拘はらず、此の種の法則は、決して吾人に取りて先天的のものではない。即ち吾人は、熟練なる滑冰者として此の世に生れ來るのではない。此の反對に、吾人は經驗よりして之を知得した。吾人は均衡を保持する爲には、甲若くは乙の場合に於て如何に行動すべきかを發見したのである。

さうして此の如き經過からして、一の規則、或は他の語を選ばなければ、一般的習慣といふものが發生した。即ち幾多の經驗といふものは、此の如き一般的習慣に迄凝結したのであつて、爾來吾人の次の運動といふものは、何等の思索を加ふる事なくも、自然に之に適合するやうになる。之を換言すると、次の運動は、世に云はるゝ如く、自動的に法則に適合する。かゝる法則は、よしや吾人の意識の對象でないにもせよ、尙吾人の確固たる精神的財産である。かゝるが故に、此の法則は、吾人の中に於て、たとひ吾人が之を意識中に持來す事が能きないにもせよ。尙その働きを及ぼす。之は、かゝる働きをば、各個の場合に於て、その場合の性質に合ふやうに及ぼす。此等の事をば、吾人は又、次の如く言明する事によつて發表する。曰く、吾人は、法則に關しては何等の合悟性的知識を有しない。吾人は「感情の中に於て」之を有すると。

此の如くして、吾人は、あらゆる種類の法則或は規矩をば、感情の中に於て有する。吾人は又、語感といふものを語り、さうして此の語によりては、言語の合法性といふものが、吾人がかゝる合法性を擧示する事が能きな

いにもせよ、尙吾人を正當に指導するといふ事を言明しようと欲する。次に、之と同種類の事をば、吾人は「手練」例へば道徳上の手練に就いて語り、さうして次のやうに云ふ。吾人が道徳的行動の規矩を意識中に於て有する事なしに、此の規矩は吾人を指導すると。

特に此の如き方法に於て、或る運動法則といふものは吾人を指導する。さうして之は、二重の方向に於て之をなす。その一は、實際的に吾人を指導する。次には、之は、空間的形及び運動を吾人が判断するに際して、指導する。

此等の事とても、日常の経験が吾人に證明をする。第一に、此の場合に直接的に附屬しない實例を假り來れば、吾人は如何なる運動が、人間に於て自然的であり、又如何なる運動が強制的のものであるかに關し、直接なる意識を有する。之を詳言すると、如何なる運動に於て、一度發生した運動的刺激、或は一度發生して恐らくは斯かる刺激の甚だ單一でない結合といふものが、自由に働くか。若くは此の反對に、如何なる他の運動に於て、混亂が加はり障害が來り、新なる運動的刺激が、既に開始された運動の自然的經過を中止せしめたり改訂したりするかを、直接に知得するのである。

第二に、之と同様の確實なる感情をば、吾人は物體界に於ける運動を判断するに際しても有する。

最後に、吾人は、此の種の判断をば、特に幾何學的の形に接しても、行ふ。さうして此の際、器械的感情といふものは、いつでも確實でないにもせよ、大體に於て驚くべき程確實に、吾人を指導するのである。

五 線の器械的説明と再認識

此の題目に關しては、一つの點に迄特に説及し置く必要がある。それは即ち次の如くある。吾人は一體、どうして、圓をば圓、楕圓をば楕圓、波線をば波線、螺線をば螺線と認識するであらうか。但し此の際附言するが、茲にいふ螺線とは、特に、彎曲といふものが、始めには益々急速に實行せられ、次には緩徐となり、最後に漸近的に同一なる彎曲に迄移行するものを指し居るのである。

蓋しかゝる疑問に對しては答へらるゝであらう。曰く、吾人は此等の線をば頻繁に目視した。さうして之をば今感官的の形態記憶の力により再び認識をする。

けれども此の如くして再認識するといふ事は、事情によりては不可能である。今右の實例中の比較的單一なるものを選んで説明して見ると、吾人は、恐らくは、今吾人が知覺する所の波線と同一なる波線を一度も目視しなかつた。吾人は單にあらゆる種類の他の波線を目視した。而もかくあるとすると、吾人は、その各個の部分に於て、過去の記憶形相と一致するが故に現在の波線をば、此の如き波線として認識するのではない。之に反し、現在の波線が、過去の波線と共通的なるもの、即ち兩者をして一般的の「波線」となるに至らしむる所の共通的なるものを有するが故に、此の如きものとして認識する事になる。

併しながらあらゆる波線の此の如き共通的のものは、決して直觀的の所與中に存在しない。波線なるものは、こゝそこに現出する所の彎曲といふものゝ特定の形によつて波線とならない。又特定の彎曲の連續及び相互移行

によつても、斯くならない。結局、吾人が特定の波線に於て目視する所のものゝ中の何ものと雖も、一般的の波線に共通でない。

之に反し、あらゆる波線の特異なる共通的のものは、唯その構成の法則、即ち波線運動の器械的法則である。

此の種の法則をば、吾人は「感情」の中に於て有し、さうして之により、波線をば、此の如きものとして再認識するのである。(余は波線の特異なる共通的のものをば、或る二三の者のやうに、「形態性質」といふものと、故意に呼ばない。此の如き名稱は不適當である。之は、各の場合に於て、右の如き共通的のものゝ本性に關し何ものをも言明しない所の單なる名稱である。余を以て見ると、「形態性質」なるものは、共通なる器械的法則、或は之をより精密に云へば、之に關する感情である。)

此の如き事實關係のみよりして、他の全然不可説明的のものが、説明され得る。その不可説明的のものとは、吾人が、他の形に全然同一である所の一つの形をば、此の如き他の形が直接にそれに並列して與へられてあるにもせよ。尙同一なるものと、時としては直に認識しないといふ事である。まさしく此の如き場合に於ては、器械的合法性といふ印象が、變化を受けたのである。

之に關しては、たゞ一つの例を挙げれば十分する。吾人は、一又は多くの點に於て、圓線をば、横線によつて中斷する。かゝる場合には、圓線といふものは、吾人の目に對して變化せずにある。けれども運動の連続といふ印象は壊亂される。此の運動は、吾人の印象に對しては、その統一性或は内部的連絡といふものを喪失した。之を詳言すると、平等的に進行しさうして全體を透して統一的に通過する所の運動といふものは、その線をして圓といふものに迄丸くならしめ、且つ直線として前進をなさうといふ其の(即ち運動の)自然的傾向をその度毎に消滅せしめ、線をば絶えず中央の方に迄向注せしめ、さうして此の如くして統一的の流動をなして己れ自身に

迄復歸せしむるのであるが、此の種の運動は、中絶されるのである。此の如くあるが故に、右のやうな中絶された圓線は、それに全然同一でありそれかというて中絶の横線を有しない所の他の圓線と比較して見ると、或は又純粹なる圓線の記憶形相と比較して見ると、中絶され居る丈の程度に於て、推出したり、曲折したり、歪められたりする。「中絶され居る丈の程度」とは、詳言すれば、彼れが如き變化された器械的條件が自然に齎すが如き方法に於てといふ事である。かくて右の如く推出したり、曲折したり、歪められたりするといふ印象は甚だ強力であつて、爲に吾人は、彎曲の該當する所の變化をば直接に中斷點に於て認むるといふやうに感ずる。要するに實際吾人の判斷に於ては、器械的動力、即ち圓線中に於て吾人に對して存在する所の衝動といふ動力が、優勢である。かゝる動力は、常に吾人の感情に對し、確固たる判明を以て表現するのみならず、更に之は、圓といふ形を判斷するに際しても、外觀上優勢である。蓋し線といふものは、變化された器械的條件といふ假定の下では、かゝる變化を受けざるを得なくあるが故に、かゝる變化を受くるやうに、線が吾人に對して見ゆるのである。

此の事實關係を説明する爲には、吾人は、つまり之に屬しない所の一の類似例を附加して見よう。吾人は、目から異なりたる距離にある物體の大きさを測定すると假定する。吾人にして、若しも二つの相互に同一であつてそれかというて大きさは異なるといふ二個の物體の中で、より大なるものをば、兩者が均しい大きさに見ゆるやうな距離に置くとするも、尙兩者は同一の大きさに見えない。之に反し、吾人は、より遠方にあつてさうして實際より大なるものをば、より大に見るやうに感ずる。之は外の故ではない。より遠方にある物體はより大であるに相違ないといふ意識からして、それがより大に見ゆるといふ印象が、此の場合に發生するからである。

兎に角、上述したる所よりして、次の言明は何等の疑惑を容れない。曰く、幾何學的形體に於ては、常に器械的の合法性が實現されるやうに見ゆるのみならず、更に、合法性といふ表象が、此の形體に關する直接的印象中に於て統配的の元素となると。

六 繼起的把握と感情移入

以上述べたる所よりして、空間的形の器械的説明といふ事實、並に美的印象がかかる説明に依從するといふことが、今の所、確立された。けれども斯くすると、一つの疑問が起る。曰く、如何にして器械的説明なるものが發生するか。詳言すれば、吾人が、静止する所の形を運動に迄分解し、さうして次に之を一般的の運動法則の下に立たしむるといふ事は、如何にして起生するかと。又之に對して第二の疑問が附加される。曰く、如何にして器械的説明が美的印象を起さしむるかと。

されど此の二つの疑問の中の第一は、より正確に、次の如く直に發表されねばならぬ。吾人が器械的説明をば必然的に實行するといふ事は、如何にして起生するかと。蓋し、若しも幾何學的形の美といふものが、此の種の説明からして可解的になるとするならば、かゝる説明は必然的のものでなければならぬからである。否吾人は、美といふものをば、形に對して吾人の任意に歸與しない。之に反し、かゝる美は一つの事物の權利と所有である。換言すれば、一つの事物の美を根據づける所のものは、いつでも不可分的に、その事物に附屬し居らねばならぬのである。

次に第二の疑問に對しては吾人は即座に次の如く解答する。器械的説明自體でなく、之に反し之と直接に結合せられたる人間化といふものが、美的印象の根據であると。

吾人は茲に、人間化をば、器械的説明と直接に結合せられたるものといふが、實際に於ては、事實關係は次の如くある。即ち器械的説明が最始のものでもなければ、又人間化が最始のものでもなく、之に反し兩者は同時に發生するのである。

されど吾人は、兩者に對しては前提といふものゝ存するを知得し居る。即ち一つのものとなつて聯合されある所の二種のもものが、特に留意さるべくある。

先第一には次の如くある。空間的に延長せる自然物體の把握と同様に、線の把握も亦、自然に繼起的に仕遂げられる。吾人は、部分と部分とを附加し、かくて線の全體を知得する。線なるものは發生する。換言すれば、線の光學的形相即ち視覺的形相は發生しない。此の如きものは寧ろ、茲にいふ所の「發生」に於ては、前提されてある。されど此の種の視覺的形相は、先第一に、その外圍の中に混在する。即ち、之は全然、吾人が目視する所の全體中に於て、一緒に與へられてある。若しも線にして、此のやうな線といふ獨立的の事物として、吾人に對し發生すべくあるとするならば、吾人は先づ之を獨立化せねばならぬ。他語を以て云へば、吾人は之を外圍から取出し分離せねばならぬ。或は、吾人は之をばそれ自體として把握せねばならぬ。而も此の如くするといふ事はまさしく繼起的に仕遂げられる。實に此のやうな繼起的の「統覺」により、線といふものは、そのやうな分離された事物として發生するのである。

ところが此の種の發生といふものは、一の空間的のものゝ發生として、取りも直さず運動であるのである。而もかゝる運動は是、表象された運動ではなくて、直接に體驗された運動である。之は先第一に、吾人の働作、切言すれば吾人の内部的働作の運動である。即ち之は吾人の行爲である。されど正しく此の如き行爲は、同時に線の致さしむる所である。吾人が第七章に於て語つた所の岩といふものゝ繼起的發生と同様に、茲にいふ線の繼起的發生も、吾人の氣儘といふものゝ司る所ではない。之に反し、線の存在及び形といふものが、之を發生せしむるべく吾人を強制する。即ち此の如き事をば、線の延長、空間的「連續」及び之と同時に、點或は線の部分といふものゝ連續が、實行するべく強制する。此の如きが故に、吾人の行爲といふものは、線の形の中に於て根據づけられてある。之は、線に迄「附着」する。更に此等の事を簡言すると、運動及び行爲といふものは「客観性」を有するのである。

此の場合に於ても亦、事實關係といふものは、吾人の省察に對して此の如くあるのではない。吾人の省察といふものに對しては、運動なるものは、全然線の中に存在しない。即ち吾人のみが運動を實行し、吾人のみが、線の點から點に迄前進するのである。然るに彼れが如く直接に體驗された運動の場合に於ては、省察の結果言明せらるゝ所のものなどは少しも問題とならない。之に反し線の直接なる觀照により吾人の體驗する所のものが、問題となる。さうして斯くあるとすると、下述の如き事が起る。曰く、吾人は、吾人の欲求及び行爲をば、線に迄結合せられ、線の中に於て與へられ、之を線の致さしむる所として感ずると、更に之を手早く云へば、吾人は、線の中に於て、前進し活動しつゝあるやうに吾人を感ずるのである。

而も此等凡ての事は、吾人が既に知得せる如く、感情移入といふものゝ意義である。感情移入なるものは、吾人の自己感情の右のやうな客観化、即ち「他のものゝ中に於て吾人が感情を起す」といふ事を表示する。此の故に、線を「發生」するに至らしむる所の統覺的運動といふものは、線の中に「感じ込まれる」のである。

さうして此の如く述べ來ると共に、吾人が前に眼中に有して居つた所のもう一つの事柄といふものは、同時に説示せらるゝ事になる。蓋し繼起的觀照なるものは、是部分と部分との附加作用である。さうして斯くあると共に、之は一つの統一體を繼起的に作出する作用である。而も此の種の統一體は、是客観的の統一體であるのであつて、即ち之は線の中に根據づけられてある。之は、部分といふものゝ空間的「關連」或は連續の中に根據づけられてある。換言すれば、線の恒常無中止の「進行」中に根據づけられてある。更に、此の如き統一體とても、實際に於て、吾人即ち把握者の統一體である。即ち吾人の内部的働作の統一體である。されどまさしく斯かる統一體は、線の中に存在する。或は線に迄附屬する。此の故に、統一體は、線に附着するもの、即ち線の統一體であるやうに見ゆる。線といふものは、己れ自身をば、統一體に迄總括する。之は、此の事をば、その發生の各の瞬間、即ち各の瞬間毎に、爲すのである。

七 經驗的感移入への移行

右の如く述べ來るとはいふものゝ、未だ、十全なる器械的説明、從つて又十全なる人間化といふものは、叙説し了られない。即ち單に次のやうな一般性の事が擧示された。それは、線の發生、並に一般の内部的働作に基づく

その形の發生といふものである。かくて器械的の合法性に迄説及されぬ。而も此の如くあると共に、多様の種類の線をして、吾人の美的觀照に對して、存在を遂げ、その個別的性質を取得するに至らしむる所の「力」といふものゝ差異は、叙説が缺損する。更に又、此の種の力の交互影響といふものゝそれも、缺損する。たゞ、此の如く立入つてさうして個別化する所の器械的説明、並に、かれが如き一般性のもとなつての該當的人間化に對する基礎或は組立だけが、與へられてあるのである。

ところが此のやうな組立といふものは、今や必然的に填充される。即ち若しも運動にして一たび線の中に存在せしめらるゝならば、かゝる運動は必然的に、經驗からして吾人に知得された器械的法則の下に歸屬せしめられる。そこで、線のそれゝの性状に應じて、彼れが如き基礎の上に、力及び運動的分力のより多く豊富なる系統又はより少く豊富なる系統といふものが、構成される。かくて彼のやうな組立は、より多く豊富又はより少く豊富なる填充を取得する。此の如き填充は、填充者にして「力」である限りに於ては、同時にそれに該當する程度に豊富なる人間化作用であるのである。

されど之に關しては、尙一つの問題が残存する。蓋し具體的の物體、例へば吾人の手の上に存するか、又は空中に懸垂するとかと表象された石、或は他の球に衝突する所の一の球などか、如何にして力の帶有者となり得るかといふ事は、吾人に對し直接に可解的になつた。けれども此の種の感情移入を根據づける所の一切の説理は抽象的の線の場合に於ては、適當しない。吾人は、かゝる線に對しては、現實の交互關係に立ちもしなければ、又此の中に於て因果的連絡といふものをも發見しない。而もかくあるが故に、此の場合に於ては、一定の力及び働作の感情移入に對し、特殊なる連結點即ち説明根據といふものが必要であるやうに見ゆるのである。

ところが此のやうな連結點は缺損しない。吾人は上に述べた。垂直的方向と水平的方向との反對は、決して幾何學的の反對ではなくて、器械的の反對であると。詳しくいふと、前者たる垂直的方向といふものは、重力の方向、並に重力に對する直接の反對的働きの方向であり、後者たる水平的方向といふものは、重力に對しては中性的なる方向であるのである。

併しかゝる言明に反對して注言さるゝかも知れぬ。曰く、垂直的方向とても、先第一には、單に、下から上迄、或は上から下に迄經過する所のものであり、又水平的方向は、右から左に迄、或は左から右に迄進行する所のものであると。

此の如き注言は確に正當である。けれども吾人は問はざるを得ない。此の注言は何を言明するか。詳言すれば上とか下とか、右とか左とかを何が特徴づけるか。何ものが、吾人をして、無限に澤山なる方向の中からして、下から上へ方向、右から左へ方向、或は此等の逆の方向を取出し、さうして此等をばそれゝ特殊の名稱を以て呼ぶやうに至らしむるか。右の諸語の本來の意義は何から成立するかと。

かゝる疑問に對する解答は次の如くある。右の諸語の本來の意義は、吾人の身體の或る特異なる運動法といふものから成立すると。即ち上とは、吾人が向つて可感的に吾人を上昇せしむる所のものを指し、下とは、吾人が向つて可感的に吾人を沈下せしむる所のものを指す。かくて「垂直的方向」といふ語は、元は、吾人の身體の上昇或は沈下方向といふもの以外の何ものをも意味しない。之と同様に、右及び左も、本來、吾人の身體の特定

にして、直接的に異なり且つ反對するものと體驗された運動、即ち正しく右及び左への運動によつて特徴づけらるゝ所の方向に對しての名稱であるのである。

而も此の如くあるが故に、第一に、吾人の身體を假りて内容的に特徴づけられた上と下、右と左といふものがある。次には、吾人が、吾人の身體をば外圍の空間に迄組入れるとか、又は吾人の外にある物體を吾人の身體に迄關涉せしむる事により、此等物體の中に、上下、左、右が投入される。さうして之が濟んで後始めて、第三に吾人の外に於て、凡ての他の方向から區別された二つの方向が存在する事になるのである。

されど此の如く斷定するといへ、之からして直に、垂直線及び水平線の中に或る力及び働作を感じ込むに就いての右の如く追求された連結點といふものは、未だ與へらるゝに至らない。詳しくいふと、吾人が目視する所の垂直線の方向をば、吾人が向つて吾人の身體を上昇せしむる所の方向と關涉せしめ、かくて上昇された身體と同一の方向を有するものと認識すると同時に、此の線の中へ上昇を感じ込むといふ事は、遂了されない。けれども、此の如き感じ込み、即ち感情移入といふものが如何にして發生するかといふ事は、今や可解的になるのである。

吾人は先づ垂直線を觀照すると假定する。此の如き觀照中に於ては、吾人の眼、進んでは頭及び身體を以て線に追隨すべき可感的要求といふものが、吾人に對して存在する。換言すると、吾人は、眼、進んでは頭及び身體の上方運動或は下方運動の一の傾向といふものを體驗する。即ち頭の上昇及び身體の垂直的伸長の傾向、或は下方への頭及び身體の運動の傾向を體驗する。吾人は、線の觀照に於ては、その存在及び形に迄、上昇或はそれに

反對する運動の傾向が、直接に結合せらるゝのを感じするのである。

ところが此の事は、次の事以外の何ものをも意味しない。曰く、吾人は、此の如き吾人の空間的行爲をば、線の中に感じ込む。此の故に、線の中に、此の種の行爲といふものが、吾人に對して存在する。即ち線の中に、上昇或は自己活動的の沈下が存在するのである。

次に吾人が、自然的の頭の姿勢即ち眞直なる頭の姿勢に於て、一の水平線を觀照すると假定する。此の場合に於ては、吾人は、線と同種類であつて、さうして同時に上と下とに對して中性的なる左右への運動に對する傾向を感知する。吾人は、運動の中に於て、右方運動と左方運動との傾向の均衡を感じる。更に此の如き均衡とても亦、線の存在及び形に迄結合されてあるのを知る。吾人は此の故に、かゝる均衡をば、線の中に感じ込む。かくて水平線といふものは、吾人に對し、此の如き均衡の線となるのである。

さうして此のやうに述べ來るといふと、如何にして吾人が、特定の方向及び種類の行爲をば、垂直線及び水平線の中に感じ込むに至るか、明瞭になつた。此の如き感情移入なるものは、實に垂直的方向及び水平的方向といふものゝ特殊の本質を構成するものである。

最後に吾人は、かゝる感情移入の尙他の場合を附加する。即ち吾人が、任意なる延長及び限界の線或は平面を觀照すると假定する。此の場合に於ては、限界といふものが、吾人の統覺的運動に對し停止を命ずる。之は、點から點、又は部分から部分に迄の吾人前進の傾向といふものを可感的に限制する。されど此等の運動及び傾向は線或は平面に迄結合されてある。隨つて吾人に對しては、線或は平面の中に於ける運動及び傾向である。此の故

に、線或は平面といふものは、その延長しようとの欲求に於て、限界によつて妨害し制限される。換言すれば、線の中に於ける延長的働作に反對して、一の限劃的働作といふものが働くのである。

八 力などの感情移入

以上の如く、直接的なる觀照から發生する所の、特定なる働作の感情移入をなすと共に、線或は平面といふものは、直接に、事物といふものゝ範圍、或は之をより一般的に云へば、物體的空間の範圍に迄、移行をなすのである。

さうして今やかゝる線或は平面は、此の如き範圍中に於て合經驗的に支配し居る所の一般の器械的合法性といふものゝ下に、必然的に立つに至るのである。同時に又、右の働作は、それ〴〵の事情に應じ、甲若くは乙のより詳密なる規定、形成、豐富化を受くるやうになる。

此の事とても、吾人の垂直線が、最も單一なる方法に於て顯示する。由來垂直線なるものは、下から上に迄、或は此の逆の方向に働作して居る。而もかゝる働作は是吾人の働作であつて、即ち線の中に迄感じ込まれたのである。されど線の中に於ては、直接に、次の如き事が存在する。即ち、此の線といふものは、重力に打勝つ所の一の働作、或は重力の一の働作であるといふ事である。否吾人は、此のやうなものとして、吾人の垂直的働作をば直接に感ずる。ところが此の如くあると共に、垂直線なるものは、不可抗争的に、器械的合法性、即ち重力といふものが遡由して働いたり、或はその働きが沮止されたり、若くはそれに抵抗されたりするといふ器械的合法性

性の見地の下に立つやうになる。

而も之と同様の事は、各の線に就いても言明する事が能きる。蓋し各の線なるものは、主として、吾人が、一切の空間的に延長せるものに對して行ふと同様の方法に於て、凡ての線に對して行ふ所の繼起的統覺の對象である。此の如くさるゝよりして、先第一に、より定確なる内容なしの感情移入、簡言すれば、謂ふ所の「一般の統覺的感情移入」なるものが發生するのである。

ところが此の如き一般的の感情移入に立止まる丈の間は、線なるものは、單一にして、甲若くは乙の同一又は可變的の方向に於ける己れ自らの働作の爲に發生したり經過したりする所の線であつて、而もかゝる働作のより詳密なる規定もなく、隨つて、何故に此の働作が、此のやうな形を發生せしめ、さうして他の任意の形を發生せしめないかといふ疑問に解答するなどの事をしない線であるのである。

けれども此の疑問といふものは、次の如くさるゝ場合には、いつでも解答せらるゝのである。それは即ち、運動或は空間的働作をば、まさしく運動或は空間的働作として、此の如き特定の線、例へば此の如き特定の方向を有する線に對して合經驗的に成立するといふ普通の器械的合法性に従屬せしむる場合である。さうして此の際、かの垂直線や水平線や限劃された線に於て指示したやうな連結點といふものは、いつでも媒介をなしながら現出する。否、一切の空間的形に於けると同様に、一切の線に於ては、垂直性と水平性、上と下、右と左、殊に延長と限劃との兩反對者といふものは、復起するのである。

かくて例へば、波線といふものは、經驗並に經驗からして獲得された器械的合法性といふものを別にするも、

全然、一の内部的働きの爲に、それがまさしく経過するが如く経過する所の一の線となる。更に此の場合に於ても、何故に之がかゝる形に於て経過するかといふ事を吾人に對し可解的にならしむる所の、働きのより精密なる規定といふものは、缺損する。けれども此の働きの器械的合法性の下に立たしめらるゝ事により、之はより精密なる規定を取得する。そこで、今や、線といふものは、波状運動の普通の法則に基いて遂行せらるゝ所の繼起彈力的の波立ち運動及び波下り運動の線となるのである。

或は尙少しく單一でない線を取上げて見よう。かの上に述べたやうな形の螺線、詳言すれば、彎曲が、始めには急速に増加し、次には徐々に増加し、最後に線の終端になると、恒常的の彎曲、即ち圓形の彎曲に近接するといふ螺線は、器械的合法性を離れ見ると、何故にそれが然く彎曲するか可解的になる事なしに、事實的の、よしや己れ自らの力からであるとはいへ、特定の形に於て彎曲する所の線たるに外ならない。けれども此の如き線が、器械的合法性の下に立たしめられるといふと、之は次の如くして發生する所の線となる。それは即ち、平等的に彎曲された彈力的の線の中に於て、一の直線的にして隨つて線の伸長を遂げようとする所の運動といふものが働き込むのであつて、而も此の運動は、螺線的一端に於て開始せられ、さうして他端の方になると、抵抗を打破するが爲に漸次に衰弱するといふものである。かくて此の螺線は、右の如き直線的運動と、彎曲された線の彈力性の反對的働きの間の交互的働きの産物として現出する。伸長を遂げようとする所の運動といふものは始めには、彎曲をば、或る度迄消滅せしむる。けれども之は此の如くなす事により、彈力的の線の中に於て、増加する所の反對的傾向、即ち始めの彎曲に迄復歸しようとの増加する所の傾向といふものを喚起する。此の如き傾向は、一には、その強度の高上の爲に、二には伸長運動の減少の爲に、益々容易く實現される。此の故に先第一には、始めの彎曲に益々急速なる復歸が仕遂げられる。されど此の如き復歸が仕遂げらるゝ事により、復歸の傾向といふものは、順次に減少する。随つて或る點から先は、始めの彎曲への近接といふものは、益々徐々となる。最後に、線の終點に於ては、復歸は全然仕遂げられる。此の故に、此の點といふものは、全體の靜止點となるのである。

第二章 單一なる形の美學に對する細説

一 一般の統覺的感情移入と合經驗的の感情移入との

相互關涉

上に述べたやうな原始の「一般の統覺的感情移入」、詳言すれば、吾人が吾人の繼起的把握といふ働きの靜止する所の線の中に感じ込むといふ單一なる事實をば、吾人は、空間的形の中への感情移入の基礎或は組立と呼んだ。之に反し、合經驗的の感情移入、即ち物體界に於ける運動の因果的制約及び合法性から吾人に對し發生する所の感情移入をば、右の「一般の統覺的感情移入」の内容のより精密なる規定及び發展と稱した。

ところが此の如くより精密なる規定及び發展といふ語は、合經驗的の感情移入に於ては、彼れが如き原始の統覺的感情移入に對し、質的に新奇なる何物をも附加しないといふ事を言明するのである。此の事に關しては、前

に具體的事物への感情移入を述ぶる際に力説して置いた。されど今茲に、此の事實關係を尙一度詳細に高調して見よう。

本來經驗なるものは、單一なる繼起的把握に比較して見ると、疑もなく一の新奇なる動力である。けれども、經驗の基礎の上に感じ込まれたるもの及び感じ込み作用即ち感情移入自體は、かの一般の統覺的感情移入と同種類のものである。更に、吾人が、經驗の基礎の上に、就いて語る所の欲求とか働作とか力とかいふものも、吾人が既に知得せる如く、統覺的體驗であつて、さうして彼れが如き統覺的運動、即ち線の中に感じ込まれた、線の部分の繼起的把握と同種類のものである。尙又、器械的の力といふものも、その根元的の本質からすると、一の内部的運動に迄の、吾人によつて感ぜられる傾向及び強制に外ならない。即ち一から他に迄内部的に進行したり、或は一をば他に迄内部的に附加したりするといふ傾向及び強制に外ならない。之は、觀照の事物の中に感じ込まれた此の如き傾向及び強制である。さうして最後に、感情移入自體も、兩場合に於て同一なる事柄であるのである。

されど凡て此の如くあるにも拘はらず、一般的に、線をば吾人に對し發生するに至らしむる所の「一般の統覺的感情移入」といふものは、必要なる基礎、或は必要なる組立であるといふ事を牢記するのは、重要である。かかる感情移入は、先第一に、靜止的の線の中に生活といふものを投入するものである。而も此の如き事が爲された後始めて、かかる生活を經驗の法則に基いて發展せしむるといふ事が、仕遂げらるゝのである。

併し此の事に關しては、吾人は尙一層多くのものを言明せねばならぬ。成程、經驗といふものは、感情移入に對し、その定確なる内容を與ふるに相違ない。けれども又、一の線の單なる繼起的把握といふものは、既に、吾人が線の中に感じ込む所の運動及び働作の種類に對し、規定的働きを及ぼす。かかる把握は、己れ自らの方向により、線の發生する所の方向を規定し、併せて同時に、「器械的説明」をも、質的に規定するのである。

但し此の際、二種の可能といふものが存立する。第一には、線の繼起的把握の方向、並にかゝる把握の基礎の上に線の中に感じ込まれた運動及び働作が取得する所の方向といふものが、吾人により隨意的に確定される。或は又第二に、線の性質、又はそれと他の線との連關といふものが、吾人の把握働作の性質の結果上、方向を制約するのである。即ちかかる第二の可能を逆に言明すると、吾人の把握働作の性質といふものが、線、又はその線と他の線との連關の性状の基礎の上に、繼起的把握の特定の方向、並に之と共に、線の中に於ける運動及び働作の特定の方向を制約するのである。

かの一般の統覺的感情移入の此の種の意義といふものは、既に上に叙説して置いた所の事情中に於て、判明に顯示される。吾人は知得した。直線といふものは、吾人の繼起的觀照のそれ／＼の性状に應じて、異なりたる合經驗的感情移入の對象となり、さうして斯くなる結果、異なりたる「内部的本質」を取得するといふ事を。此の如き言明は、特に、例へば垂直線に關して成立する。若しも此の垂直線にして、それ自體として存立するならば然る場合には、吾人は、吾人の繼起的把握に於て、上と下とから始むべき自由を有する。假りに吾人にして下から始むるならば、線といふものは、上の方向に於ける進行を要求する。今や線は此の如き方向に於て發生をなすさうして此の種の發生といふものは、經驗的の感情移入に對しては、重力といふものゝ繼起的打破に基いての發

生となる。次に、吾人は上端に於て觀照を始むると假定する。かゝる場合には、線は逆の方向に於て發生をなすさうして其の器械的本質といふものも、異なりたるものとなる。即ち線は、重力の爲に、重力の働きが、線の内部的連絡上の反對的働くと、均衡を取得する迄は、沈下する。此等の場合に於ては、器械的合法性から獨立的に存立する所の統覺的感情移入といふものが、第一のものとして、判明に立證される。此の種の感情移入は、既に言明せる如く、添附せらるべき合自然法則性の働く方向、並に之と共に、かゝる法則性の種類をも規定するのである。

されど此の如き事實關係といふものは、若しも、出發點、隨つて又繼起的把握の方向といふものが、隨意的に指定されず、之に反し、吾人の把握働きの性質、或は線又はそれと他の線との連關により、指定せらるゝ場合には、より重要なものとなる。

今一の垂直線が、一の水平線の中央から、上方に伸長すると假定する。此の場合には、先第一に、線系統を一の全體として把握すべき要求、或はより精密に云へば、線系統をば、全體として、繼起的に發生をなさしむべき要求といふものが存立するのである。

ところが、此の如き要求をば、吾人は唯、線系統を唯一の出發點から發生をなさしむる事によりてのみ、満足せしめ得る。さうして此の種の出發點としては、二つの線に共通なる點といふものが、吾人に提供される。蓋し吾人が、此の如き共通なる點から出發し、さうして之から一方に於ては右と左、他方に於ては垂直線に沿うて、隨つて上方に迄、觀照しながら吾人を向注せしめ、さうして斯かるが故に、此の方向に於て線を發生せしめ、他

の方向に於て發生せしめないといふ事は、吾人の把握働きの性質の致さしむる所である。而もかくなると共に、器械的説明といふものも亦、指定せらるゝ事になる。即ち垂直線といふものは上昇する。隨つて亦、重力を打破する事により發生する。さうして水平線中に於ては、伸長力といふものが、一端から他端に迄でなく、之に反しその中央から同時に兩端に迄働くやうになる。

吾人は言明した。合經驗的感情移入なるものは、多様な力を作出すると。之は又、之と同時に、力の交互的働き、例へば、重力とその重力に反對して開始しさうして之を打破する力との交互的働きといふものを作出する。

ところが、此の場合に、かゝる交互的働きの中に於ても、かの物體的の形に於けると同様に、能働性といふものに對して、受働性、一つの働きの受忍、屈服及び抵抗が、結合される。特に又、次のやうな屈服が發生する。それは即ち屈服すると共に増加する所の反對的働きを起さしむるといふ屈服である。一言以て覆へば、弾力性といふものが發生する。之に關しては、吾人は後になつて、立戻つて再び叙述する事にする。

二 線の中に於ける自由と強制

右の如き屈服或は受働性には、受忍された強制といふ意義に於ける受働性といふものが、對立する。此の如き強制といふものは、生活否定である。さうして右の屈服が快感を起さしむると同様に、此の種の強制は不快感を起さしめ、美的には無價値である。之は、線をして醜ならしむる。

之に反し、此の如き強制からの自由といふものは、自由、即ち形といふものゝ内部的自由である。さうして之は、形をして美なるやうに見えしむる。

而もかく述べると共に、吾人は、空間美學に對して最も重要な概念、即ちまさしく自由といふ概念に迄到達するのである。凡て一つの形の自由とは、無妨害的に働き、同時に、人間的行爲といふ光明に於て觀照された所の内部器械的合法性（形といふものゝ）なるものに外ならぬのである。

ところが此の如き自由をば、吾人は、各の任意なる線の中に於て發見しない。一體、空間的形をば、器械的合法性の下に従屬せしむるといふ事は、先第一の要求である。即ち、吾人に知得された器械的法則の光明に於て形といふものを觀照すべき一の強制といふものが、吾人に對して存立する。けれども各の特定なる線に於ては、此の如き從屬が遺漏なく成功するや否、詳言すれば、形といふものが、己れ自身の中に與へられたる力或は働作から、器械的合法性に基き可解的になるや否やといふ問題が存する。假りに此の如く可解的になるとするならば、然る時に、形といふものが、始めて、眞に、己れ自身の中に於て器械的に合法的である。さうして斯かる場合には、之は自由である。又此の自由は即ちその美となるのである。

併し吾人は、此の如き自由といふ概念に、尙一瞬間立止まつて吟味をなさねばならぬ。由來吾人は、吾人の中に於て吾人の行爲の根據が存在する場合には、換言すれば、吾人の行爲の中に於て、吾人の中にある所のものが、異他の何物によつても妨害されずに働き得る場合には、吾人自らを自由と感ずる。之と同様に、空間的形も亦、その中に存在する所のものが、妨害されずに働き得るやうにあるならば、自由である。而も此の事は、形そのものゝ中に存在する所の力が、己れ自らの合法性に基き働き得るといふ事を意味するのである。

此の種の力は、之が形といふものゝ一片ではなくて、統一體としての形に附屬する限りに於ては、一つの個體、即ち吾人によつて感じ込まれた唯一なる自我の生活可能及び生活活動であるのである。此の故に、右の自由は、形といふものゝ自由であり、又吾人により形の中に感じ込まれた、一の個體の自由であり、さうして最終の根據に於ては、吾人が「吾人自ら」と稱する所の個體の自由であるのである。

されど此の際、一つの事が常に牢記せらるべくある。それは、感情移入の第一の基礎といふものは、吾人がいつても觀照しながら形の中に存在するといふ事である。さうして若しも感情移入作用にして、一の十全なるものであるならば、吾人は觀照しながら全然形の中に存在するのである。此の故に、吾人は、感情移入に於ては、現實の自我ではない。之に反し、かゝる自我から内部的に離斷されてある。換言すれば、吾人は、吾人が形の觀照の外に存在する所の一切のものから、離斷されてある。吾人は單に此の如き理念的自我、即ち觀照をなす所の自我である。かくある結果、此の如きものとしては、吾人は、形の中に於て、吾人を自由と感じ、さうして此の中に於て自由に吾人を生活せしむるのである。

ところが、かういふやうな感情移入作用が存立する程度に於て、形なるものは美である。さうして空間的形の美とは、かゝる形の中に於ける吾人の「理念的」にして自由なる生活營爲の謂である。此の反對に、若しも吾人にして、此の如くなす事が能きず、形の中に於て、或はその觀照中に於に、内部的に不自由にして妨害を受け、一の強制に逢ふやうに感ずるならば、形といふものは醜であるのである。

此の如くして、例へば波線なるものは美である。何となれば、その進行、より急速及びより緩徐なる屈曲、此の中に存する所の緊張及び弛緩などは、吾人により、觀照しながら波線の中に沈潜せる吾人自らの自我の、自由なる行爲及び生活營爲として感ぜらるゝからである。

而も此の如く述べ來る事により、幾何學的形の中への感情移入の意義といふものは、完成せらるゝのである。

三 線の自由と自然物體の自由

美なる幾何學的形の「自由」といふものに關し右に言明した所の事項は、吾人をして、形の中に存する所の自由に関し曾て言明した事項、即ち「自然形なるものも、それが自由である時には快感を起さしむる」といふことを想起せしむるのである。けれども此の種の自由といふものは、異なりたる種類の自由である。して又、此の自然形の自由なるものも、合法性の謂であるが、併し異なりたる内容の合法性であるのである。

吾人は曾て一の疑問を提起した。曰く、何故に線の諸部分が相互に迄關聯するか。換言すれば、何故に此等が一の「客觀的の統一體」を構成するかと。その場合に、かゝる疑問は次の如く解答された。唯一個の植物的の生活連絡の統一體に迄此等を結合するやうに、經驗といふものが吾人に教誨したからであると。此の際、生活連絡といふものが重視されるべくある。そは、彼れが如き形が、合經驗的なる形上の連絡を形成するといふ事は、美的に考慮されるべくあらず、之に反し、之等の中に存在する所の生活といふものが合經驗的に相互關聯をなし居るやうに見ゆるといふ事が、考慮されるべくあるからである。

之に反し、線の諸部分は、如何なる程度迄それが必然的に相互關聯をなすかを吾人が自然法則に基いて了解し得るが故を以て、吾人に對し相互關聯をなすのではない。即ち一の客觀的統一體を形成するのではない。吾人は此の事をば次の如く發表して置いた。曰く、線が葉や實を有するといふ事は、單なる一の自然界的習慣であるところと全然たる反對に立ちて、直線や圓や螺線といふもの、此等の中に感じ込まれた運動的力、又はかゝる力の結合からの發生といふものは、存在する。此等の線は、かゝる力から、遺漏なく、吾人に知得された自然法則上可解的にあるのである。

けだし、偶然性とか、不可測性とか、各個の自然形を一の規則に基いて構成する事の不可能とかいふものが、彼れが如き自然界的習慣といふものとなるに至つた。此の如くある事の中に於て、自然形の特殊の自由といふものが、表現されてある。吾人は知得した。此の如き自由は愉快である。之は恰も人間といふものゝ同様な自由が愉快であるが如くにある。換言すれば、之が、内部的豊富及び内部的活躍性の記號として愉快であるが如くにあるといふ事を。

思ふに、吾人が既に述べたる如く、無限に多くのものが、規則なく、人間に對して働き、異種多様な思想及び興奮は、彼れの中に於て、各瞬間自然に、喚起される。而も此の如くあるよりして、人間の行動の中に於て、無規則といふ形相が発生する。此の逆に、かゝる無規則といふものは、右に述ぶるが如き豊富と活躍性を指示するのである。

されど之と同様に、自然物體といふものも亦、力、及び力の共同的働きの詳細に認知し得べからざる異種多様

をその中に包有する。さうして之も亦、外界から及ぼす數千の偶然的影響の下に立つ。而も此の如くあるといふ事は、是自然物體の本來の性質である。そは、自然物體なるものは、決してそれ自體としての或るものでなく、之に反し自然連絡の一部であるからである。

ところがかの幾何學的の線なるものは、まさしく、それが自然連絡の中に存しないといふ事によつて、自然物體から區別せらるゝのである。その本質を構成する所のものは、勿論自然に迄屬する。蓋し器械的の力なるものは是自然の力であるからである。けれども斯かる力は、幾何學的の線及び一般の幾何學的の形に於ては、自然連絡並に自然力の無限なる交互活動の外に取出され、さうしてそれ自體として直觀に供せらるゝのである。

併し此の如き相違は、自然物體を愉快ならしめる所因と、幾何學的の形を愉快ならしめる所因とが、同一であるやうに見ゆるといふ事を妨げない。

即ち自然物體は、それが、右の自然界的習慣に適合し、同時に、各個の規則に従はぬといふ事の中に於て、その内部の本質即ち自然物體としての其の本質が自由に活動したり又は活動するやうに見えたりする結果、そのやうに各個の規則に従はぬ場合には、吾人に對し、可解的にあり、且つ愉快である。さうして幾何學的の形も、それが可認知的なる内部的合法性から直接に發生する事の中に於てかゝる形の内部の本質、即ち自然連絡の外に取出されたる形として自由に活動したり又は活動するやうに見えたりする結果、そのやうに可認知的なる内部的合法性から直接に發生する場合には、吾人に對し可解的にあり、且つ愉快であるのである。

かゝるが故に、彼れと之とに於て、吾人を愉快ならしむる所の所因が、音に自由といふものであるのみならず更に、同一の自由であるのである。即ち孰れの場合に於ても、形といふものゝ内部の本質の自由なる自己活動である。たゞ斯かる内部の本質が、彼れと之とに於て異なつて居る許りである。即ち、一に於ては、それ自らの内容に於て不可分析的であつて、さうして同時に、自然といふものゝ不可測なる連絡中に組入れられてある。然るに他に於ては、自然連絡の外に取出されてある所の、最も一般的なる力の直接に可解的なる共同的働き及び交互的働きである。彼れに於ては、自由といふものは、不可測なる自然の自由なる生活營爲であり、之に於ては、抽象的なる器械的力の自由なる自己活動であるのである。

吾人は、兩場合を尙一度説明する爲に、かの、ちら／＼落ちる所の乾燥せる木葉の合法性といふものと、落下法則といふものとして發表されてある所の合法性とを對立せしむる。

更に、吾人が之迄語つて居つた所の幾何學的の線なるものは、吾人に對し、同時に一般の幾何學的の形といふものを代表する。かゝる線は、幾何學的の形のも最も單一なる場合である。即ち、平面に於ては、最初に第二の次元が附加せられ、立體に於ては、兩次元に對し第三の次元が附加せらるゝ事により、形を發生せしめそれを存在するに至らしむ所の器械的現象といふものが、複雑になる。今や、種々の次元の中に於て働く所の力が現出する。此の種の力は、一方に於ては、各が、己れ自らの方法に於て働き、他方に於ては、相互に對し交互影響をなしながら働く。之を例へていふと、平面の水平的狹縮は、垂直的延長の傾向の増進を來さしむる。又、例へば重力の働きによつて、垂直的の容積減少は、廣さに於ける分散の傾向を生ぜしむる。けれども凡て此の如くあるが爲に、「美的器械學」の意義或は原理の變化といふものは、結果し來らないのである。

四 線の發生の特殊の條件

吾人は今、右にいふ美的器械學をば、尙一步進めて攻究すべくある。此の場合に於ても亦、吾人にして先第一に線に就いて思念するならば、吾人は同時に、平面的形及び立體的形をば、眼中に有する事になる。併し又、吾人は、茲に美的器械學の連續的攻究をなすに就いても、簡單なる告知を以て満足する事にしよう、より詳細なる事項は之を後章に譲る事にする。

一つの自然物の諸部分の合經驗的なる相互關聯といふものは、既に、物といふものゝ客觀的統一體と稱せられた。之は、同時に又、一の個體の統一體である。かくて、幾何學的形の統一體も亦、一の個體の統一體である。たゞ、彼れに於ては、まさしく自然的個體であり、これに於ては、自然力をば自然界の外に思想的に取出す事によつて作出された個體である。吾人は、前者を具體的個體、後者を抽象的個體と呼ぶ事が能きる。

ところが、前に、自然物と幾何學的形とを對立せしめた際には、後者、即ち幾何學的形の統一體或は個體性といふものが、最も十全なるもの即ち最も完結せるものと思念された。即ち、一には、幾何學的線の中に於て働く所のものゝ力は、統一體としての線に附屬する。随つて全體の線に附屬するといふ事が、假定された。二には、此等の力は、線の中に於ては、どこでも永久に與へられてある。随つて既に始めから與へられてある事が假定された。三には、永久に而も始めから與へられてある共存の力が、線の中に於て自由に働くといふ事が假定された。一例を挙げると、かの圓や波線や整正なる螺旋線に於ては、凡て此の如くある。而も此の如くあるが故にある。

ところが、此等の絶對的統一の形は、既に、諸種の條件の下に「發生」即ち各瞬間毎に新に産出され得る。けだし各の幾何學的の形體なるものは、特定の性質を有する一の實體である。例へていふと、容易なる可動又は困難なる可動、彈力的又は無彈力的なるが如きである。さうして此等の性質のそれゝ異なるよりして、之若くは彼の形が存在する。或は、その内部の本質といふものが、之若くは彼の形によりて告知される。何人も、此の如き、容易なる可動の形、困難なる可動の形、彈力的の形等の差異を知得し居るのである。

けれども又、自然界に於ては、一つの形に對し、一定の抵抗といふものが存在し得る。例へていふと、屈曲抵抗又は延長抵抗の如きである。此の際、「屈曲抵抗」とは、形といふものが、前進的屈曲に對し、之若くは彼の方角に於て順次に増加し最後には無限に大になる抵抗を提起するといふ事を言明し、「延長抵抗」とは、延長の前進的增加又は減少に對し、形が、之と同様の抵抗を提起するといふ事を言明する。兩種の抵抗は、合體して、線又は形の中に存在する力の働きといふものは、形の性質の爲に、かゝる働きの進行中に於て、一の限界に近接するといふ事を言明する。又、此の如く限界に近接する事により、更に、特異なる形、或は形の變化といふものが發生するのである。

さうして更に進んで言明する事が能きる。曰く、一つの形の發生といふものは、或る與へられたる狀況、或は

既に存立し居る形上の實情を根據としての發生として現出すると。蓋し、一の力が働き、さうして一つの形、或はかゝる形の状況性のもを存在するに至らしめた。そこで、今や吾人は、形の中に於て、力といふものが、まさしく此の如く與へられたる實情の下に働くと同様に働くのを見るのである。

此の際、本質的に二種の可能といふものが存立する。

第一には、右の如き與へられたる實情といふものは、次の如き特定の存在法に於て存立し得る。それは即ち、形といふものが、その發生し且つ進展をなす所の點に於て有する所の存在法なのである。随つて之を簡言すれば、形が、その性質上進出をなす所の發端的瞬間に於て有する所の存在法に於て存立し得る。之を例へていふと一つの線に對し、その發生の場所に於て、それが從屬する所の全體といふものにより、一つの方向が強制的に附與せられ、かゝる方向からして、線は、その經過上、己れ自らの中に存在する所の力の爲に、進出をなすのである。或は又、一つの容器の形が、最初に多少の狹隘又は廣潤を有し、さうして之からして、之は、其の形體中に於て働く所の力の爲に、進行しながら發出をなすのである。

第二には、彼のやうな「與へられたる實情」が、特定の總體的形といふ存在法に於て存立し得る。例へていふと一の線が、始めに特定の屈曲を有する。此の線は、かゝる屈曲を己れ自ら與へ了つたか、又は各の瞬間毎に之を與へる。されど同時に、かゝる線中に於て、之が消滅又は轉向を目的とする所の力といふものが働く。之を例へていふと、一の螺線が彎曲されてある。之は、一定の法則に基いて此の如くあるか。又は、かゝる彎曲を目的とする所の力の働きの爲に、此の如くある。併し之と同時に、此の中に於て、一の反對的力、即ち反對的彎曲への

一の傾向といふものが存する。此の種の力或は傾向は、彼れが如き力を漸次に打破する事により、線の經過中に於て實現される。さうして此の如き方法に於て、ウインズスライ轉回螺線なるものが發生するのである。

更に、線といふものにして、若しも彈力的のものと思念せらるゝならば、一の異なりたる形相が出現する。即ち一つの線がその形を有し、さうして多少の力を以て此の形を固守する。ところが此の線の中に於て、かゝる形の變化を目的とする所の一の運動といふものが、起り來り、さうして之に反對して、線或は彼れが如き力が、彈力的の抵抗をなすと假定する。吾人は、此の如き方法に於て彈力的の螺線の發生するのを既に知得した。

但し之に關しても、再び次の如き可能が區別せらるべくある。一つの線が、先第一に、その中に存在する所の力の指命する如くに發生する。即ち之は純粹に己れ自身から發生する。けれども、それが從屬する所の媒介物、即ち空間或は全體中に於て、之から獨立的に、他の運動、例へば特定の方向に進む所の延長運動といふものが存在する。かくて、今や、己れ自身のみからでなく、之に反し、かゝる獨立的動力の共同的働きから可解的にある所の一の線が發生する。共同的働きとは、一方に於ては、己れ自らの内部的力よりする線の自由なる自己發展と、他方に於ては右の媒介物中に存する運動の謂である。此の如くして、例へば、一切の楕圓形なるものが發生する。蓋し、楕圓なるものは、己れ自身のみよりして發生する事は能きぬ。之は、いつでも、展長された圓である。即ちそれが從屬する所の媒介物中に存在する所の一の伸展運動によつて展長された圓であるのである。

或は又、最後に、一の線がそこに存在して其の形を有し、さうして己れを主張しようと欲求する。ところが、此の場合にも亦、右に假定したやうに、此の線から獨立的に、此の線が入り居る所の媒介物中に於て、一の力或

は運動といふものが働く。併しながら、かゝる力或は運動は、形の中に於て一緒に働かぬ。或は線そのものの中に存する所の力と合體して、共同的成果を生ずるやうに働かない。之に反し、之は、既成の形に對して働く。即ちかゝる形の變化を遂げようとする。さうして之に向つて、線といふものが、再び、彈力的の反對的働きを及ぼす。今や線は、全然己れ自らの力から、己れが既に前に與へ置いた所の形の保持をなすやうに働く。かくて例へば、波線がその發展をなす所の空間中に於て、此線をば其の主要方向に於て滑進をなさしめようとする所の一の力が働く。次に線が、之に反對して、彈力的の抵抗をなす。さうして之からして、世に周知され居る新なる線が発生するのである。

五 分派の動機

右の際に於ては、線は、唯一にして不分割なる線であり、又そのやうに存留するといふ事が、假定されてある。されど、吾人が、自然物に接して爲した所の經驗からして、此の線の分散、或は又狀岐出、即ち分派の動機といふものは、吾人に對し可解的にある。特に今此の所では、波狀轉回ワウツクワンに於て起生するやうな恒常的分散といふものが、思念されてある。

今、二個の力、即ち、一方に於ては同一の方向を有する所の力、他方に於ては相互的反對の方向を有する所の力が、唯一の線中に於て、相互に結合されると假定する。かゝる場合には、相反對せる方向を有する分の働きのいふものは、相互を消滅せしむる。されど此の如き消滅をなさしむる事により、力そのものは、順次に増進せしめられる。——此の際にも、容易く了解され得る如く、力の彈力性といふものが假定されてある。——ところが之により、結合をなさしむる所の力が、絶えず打破される。さうして今や或る點から先は、反對の方向を有する兩力が、己れ自らの通路を進み行く。かくて一つの運動が常に二つに迄分散し、線は分派をなすのである。

此の如くして、例へば既にちよつと説示せる如く、波狀回轉といふものが發生する。波狀回轉なるものは、波線に對し單に螺線の附加されたものたるに過ぎない。かの自稱波線なるものは、波線の形から性質的に異なつても居れば、又自稱螺線は、獨立的螺線の形から性質的に異なつて居るのである。

之に對して附言すべきは、勿論右のやうな波狀回轉に於ては、凡ての種類の特種なる動力が、一緒に考察の中に入るといふ事である。先第一に、相反對せる力といふものが、之に於ては特殊の性質のものであるのである。此等の力は、反對の方向を有する螺線形の彎曲を仕遂げようとする。さうして斯かる力は、己れ自らの力——即ち直線的前進運動の力或は傾向——を有する所の一つの線の中に於て相互に結合される。さうして此の如き主要線の進行中に於て、彼れが如き反對せる力といふものは、絶えず發生する。吾人は又、此の種の言明の代りに、之を次の如く言明する事が能きる。彼れが如き反對せる力は、主要線の進行中に於て、或は總運動の進行中に於て、交互的に發生すると。さうして此の外最後に、此のやうな線の最も特異なる屬性として、二つの相反對せる力の均衡といふものが、本來兩者中の一つの力の利益になるやうに變動されるといふ事が起る。即ち換言すると二つの——それ自體としては同一なる——力の一が、先第一に働き、さうして之が故に、或る場所から先は、螺

線形に分派する所の形となつて離脱するのである。されど之と共に、他の力が優勢になり、さうして右と同様に離脱する。勿論、二つの反對せる力の各は、それが主要線に迄結合されてある間は、此の主要線をば、その運動中に引き入れる。此の如くして自稱「波線」なるものが發生する。此の逆に、螺線的分派といふものは、いつでも、その形に於ては、基本線中に働き居る所の凡ての力により、共同的規定をなさるゝのである。

六 謂ゆる「近代的」の線

此の種の絶えず分派する所の線とても、尙、常に絶對的に完結されある個體である。換言すれば、かゝる線中に於ては、唯一度、随つて線の經過の開始に於て與へられたる力が、それ自らの合法性に基いて働くのである。されど、結局する所又、恒常的の線、即ち無屈折なる線を構成する事の可能も存立するのであつて、而もかゝる線に於ては、右の如く、與へられたる力が己れ自らの合法性に基いて働くといふやうな事はない。即ち、此の線の中に於て働く所の力なるものは、全然、開始から與へられて居ない。之に反し、力とか働作とかは、その經過中に於て新に加へられる。されど其の此の如く加はるのは、右の力や働作が、或る瞬間に於て既成的にしてさうして多少の強さを以てそこに存在しさうして干渉するといふやうな方法に於て、はない。若しも此の如くあるとすると、屈折せる線といふものが、之から發生するやうになる。而も此の如くある事の反對に、力といふものは、順次に無から發生する。さうしてそれが此の如く發生する事により、その働きは漸次に出現するやうになる。此の故に、此の如き線に於ては、運動の一つの方法が、他の方法に迄移行行き、又、一つの合法性が、恒常的に、

随つて何等の強制なく、他の合法性に迄、移り行くのである。吾人はかく述べると共に如何なる線を茲に眼中に有し居るかをことさら言明する必要はない。之は、内容上謂ふ所の「近代的」の線藝術の線であるのである。

此の種の線とても、吾人に對し、美的に可解的にあり、又可解的になり得る。而ももはや純然器械的ではなくて、人間的に可解的になり得るのである。此の故に、之も亦、快感を起さしむる事が能きる。

若しも吾人にして、甲の場合には、開始瞬間に於て與へられたる一の衝動に服従すると假定する。かゝる場合には、若しも右の衝動が無妨害に働き得るならば、吾人に快感を起さしむる。次に乙の場合には、吾人の行爲中に於て、一の衝動から他の衝動が恒常的に繼起すると假定する。之を例へていふと、甲の場合に、氷滑りをしながら、螺線形の如き特定の運動を行ひ、さうして若しも、吾人の意志的働作が無妨害、無中止に、終り迄實現せらるゝならば、愉快を感じる。次に乙の場合に、一の運動をば、その運動から自然に發生しない所の他の運動に迄、恒常的に移行せしむる。而も此の際、第一の運動は、中絶されなく、之に反し餘響的影響を及ぼす。けれどもそれ自身の中に於ては、なく、之に反し、之が第二の運動中に移行するやうに餘響的餘影を及ぼす。さうして第二の運動は、よしや新奇なる力の努力から發生するとはいへ、尙第一の運動から、恒常的に發展をなすのである。

此の如くして、之に該當する種類の線も亦、美的に快感を起さしめ得る。之は、その經過の各個の部分に於て快感を起さしむる。何となれば、吾人が此の中に於て働くのを目撃する所の力が、自由に働き得るからである。又、相互移行といふものが、強制なしに仕遂げらるゝが故に、快感を起さしむる。最後に、全體といふものは、全體として、部分の中に絶えず新たなる力の現出するにも拘はらず、尙全體の中に於ける部分の繼起といふもの

が、明瞭に認知し得べき合法性に服従し、一の統一的にして可解的なる總運動を表現するが故に、快感を起さしむる。換言すれば、かゝる總運動中に於て内部的均衡といふものが可感的にあるが故に、斯くあるのである。

七 屈折せる線

右の如くあるとはいへ、一切の恒常的の線には、屈折せる線といふものが對立する。此の屈折せる線に於ては或る點に於て、比較的に新奇なる運動が、刹那的に開始される。即ち各の部分の場所に於て、比較的に新奇なる線といふ個體が起生する。而も其の此の如くあるといふ事は、全體の線が、各部分の直接的連絡の爲に、一の統一體であるといふ要求を提出するのを妨げない。さうして吾人は、若しも斯かる要求にして、何等空虚の要求に立止まらない場合には、全體といふものを理解し得る。空虚に立止まらない要求とは、換言すれば、若しも全體の中に於て、唯一の運動が合法的に實現せられ、さうして同時に、各個の部分に於て、全體的線の此の如き運動が分化せらるゝをいふのである。更に換言すれば、全體的線の中に於て働く所の力に對し、各個の部分に於て、相互に異なつてさうして相反對せる力が加はるをいふのである。かの「近代的」の線中に於ても、一種の分化といふものがある。けれども之はまさしく、一つの個體の働きの恒常的なる相互移行といふ形式に於てである。之に反し、此の屈折せる線に於ては、分化が、唯一の全體的個體中に於て個體といふものゝ比較的に獨立せる形成といふ形式に於てであるのである。

此の如き分化は、彼れが如き分化と同様に、その本質上からすると、形といふものゝ分化ではなく、之に反し、力、働作、官能の分化であるのである。此の種の分化が、内部的且つ合法的に實現されるといふと、先第一に、より廣大なる形上の全體といふものが發生する。かゝる全體にして、より廣大であればある程、益々多く、之は各個のものゝ比較的に獨立せる個體性を要求し、さうして最後には、全體的統一體中に於て、己れ自身の中に完結されある各個的統一體といふものを要求する。此の如き分化が、單一なる被分化状態でなく、之に反し、自己分化、自己獨立化であり、それかというて、次の如き意義に於て、全體に迄の奉仕的自己組入であるといふ事は、事々しく擧述する迄もない。その意義とは、人間が自己を獨立化し、相互に對して己れを主張し、さうして斯くあるとはいへ、一の全體といふものに迄奉仕的に自己を組入るゝといふのである。此の如き奉仕的の自己組入とても一の行爲である。此の事に關しては、吾人は後になつて再び復歸する。

八 二次元的の空間

幾何學的形の實例としては、以上の敘述に於ては、先第一に、線といふ形體が、役立つた。けれども、既に言明せる如く、線に關すると全然同種なる言明が、平面及び立體に關しても成立し得るのである。

ところが、今此の所では、特に、何等かの形をなせる立體的空間、即ち限畫された二次元的空間といふものが吾人の留意を要求すべくある。此の二次元的空間なるものは、充實されてあるか又は空虚であるかである。若しも之が充實されてあるならば、該集塊といふものも、形を別にして、活躍的にある。されど此の逆に、幾何學的立體の形といふものは、その充實を別にしても、活躍的にある。之を例へていふと、一の建築物の壁によつて包

括された空間といふものは、活躍的にある。之は、全然、而もその凡ての部分に於て、此の如くある。

感情移入を強制するに就いての最も一般的なる根拠は、此の場合に於ても亦、繼起的にして且つ統一的なる把握の中に於て與へられてある。かの伽藍の内部は、吾人の把握に於ては、恰も線の如くに發生する。之は、一つの點から發生する。一つの點とは、吾人が、之をば、その性狀上自然的に觀照する所の點である。此の種の内部は、種々の方向に擴張される。而も此の擴張は、毎瞬間毎に起る。之は、人間身體の空間と同一の意義に於てその凡ての部分に於て活躍されてある。之は、物的の立體でもなければ、又單なる幾何學的の立體でもなく、之に反し、一の美的立體である。之は、結局その四肢を有する。かくて例へば、壁龕や講堂を有する一の寺院の室は、此の兩者をば、その四肢として有する。之は伸長し、さうして斯くすると共に、その生活をば、兩者の中に注ぎ込む。恰も一の人間が、その四肢に於て己れを伸長せしめ、さうして其の生活、即ちその意志をば、此の中に注ぎ込むが如くにある。此の室は、その場合には、此の事をば、恰も一の人間の如くに、自由、大膽、時とすると遊戯の如く輕快になすのである。

さうして空間が擴張をなすと同様に、——之は決して單に特定の廣さを有するのではない——之は、その限界に於て、己れを統括する。或は限界によつて統括される。さうして斯かゝる限界作用とても、亦一の行爲であるのである。

凡て以上の如き解釋法の根柢には、大小の空間といふものが一の統一體であるといふ思想が存在する。そこで若しも吾人にして、その限界が、少し遠隔の方に、即ち廣く移動せしめらるゝならば、然る時に、此の空間は、

その始めの限界の外に擴張される。而も此の際決して、新奇なる部分が、之に對して附加せらるゝのではない。否、此の如く擴張された空間とても、一の統一體である。さうして之は、より狭く限界された統一體と同一の統一體であつて、唯少しく廣く限界された統一體であるに過ぎない。此の如きが故に、この空間中に於ては、廣く延長しようとする能力或は力といふものが存在する。而も斯かる力に對し、今や一の新奇なる力として、限界作用といふものが反對的に働く。さうして實に此等の力の交互活動及び均衡といふものにより、右の空間なるものが存在する。之は恰も、外部への働きと、己れ自身の中への總括との交互活動からして、人間といふ個體がその存立を保持するが如くにあるのである。

されど最後に、事物を圍繞する所の空間なるものは、空虚ではない。之に反し生活によつて充實されてある。此の種の空間は、事物が充實する所の空間の連続であつて、さうして此の空間の中に恒常的に移り行く。此の故に、之は、後種の空間と同一の空間である。之に加ふるに、此の空間は、人間や事物が、存在し居りて活動する所の空間でもあれば、又人間が、此の中から生活空氣を吸入する所の空間でもある。而もかくあると共に、此の空間は、人間や事物の活躍性といふものを分享する。此の逆に、事物は、空間の中に於て生活する。之は、己れ自らの生活を生活し、それかというて同時に、空間の一般的生活をも併せて生活するのである。

一部の學者は、空間感情なるものをば、眼運動に迄歸着せしめようと試みた。かくて、空間に對する快感なるものは、吾人の眼運動に對する快感である事になる。けれども此の事に關しては、運動感覺と運動表象との美的價值、或は之をより正當に云へば美的無價値に就いて吾人が曾て述べたものを比較参照すべきである。

第三章 型相化作用

スチルジールンク

一 總 說

上に語つた所の謂ゆる「近代的」の線なるものは、今や吾人の次のやうな考察に對する出發點として、尙一度役立ち得る。その考察とは、幾何學的の線と、自然界に於ける現象の一般的合法性との間の連絡をば、直接に吾人に透徹せしむるのに、特に適當するものなのである。

吾人は、此の線に關しては、之が直接器械的でなく、之に反し人間的に可解的であるといふ事を言明した。之は、自然界に於ける種々の形と同様に、此の如くある。此等の形に於ても亦、一つのもものが、他のものから、可認識的の器械的必然性を以て發生しない。之に反し、自然界の習慣及び自然界にあり勝ちな氣まぐれに基いて發生する。此の如きが故に、右の近代的の線は、自然事物の隨意的自由への類似、即ち個々に於て何等の規則に従はない自然事物の活動への類似を意味する。

此の如くあるが故に、若しも右の線が進行を続け、さうして故意的に自然形の自由といふものをば、その活動の中に入られるならば、之は可解的且つ當然の事に見ゆるのである。但し此の線は、自然界に於て吾人に接觸するやうな全體的にして且つ具體的なる構成の形を己れの中に入られるのではない、之に反し、此等の形の中に於ける運動の一般的の根本容狀、此の形の中に於て實現されてある所の、構成の一般的習慣、大なり小なり抽象的

なる形上の活動などを取入るゝのである。更に、かゝる線の中に於て、諸所に、先第一に自然物と異他無縁なる形が、自然物の形に近接し、若くはかゝる形に迄移り行いたり到達したりし、若くは、樞要の點に於て、それ自らの一般的象徴法をば、自然形の具體的象徴法によつて分化し、各個のものに迄之を發展せしむるならば、それは當然に見ゆるのである。又此の如くなる事によりては、結局、單に近代的線の曾述した本質といふものが、より十分に承認せらるゝのである。

ところが之と同種類なる現象といふものは、前に語つた所の幾何學的線に對しても、起り得るのである。此の如き線は、それ自體としては、全然自然物に對し異他無縁である。けれども又、之はさうではない。即ちかゝる線の中に宿り居る力なるものは、實に自然といふものゝ最も一般的の力である。此の逆に、自然形の中に於ては常に、一般的習慣或は合種族的の構成法則が存在するのみならず、更に、之が根柢には、一般の器械的合法性といふものが常に存在し居るのである。

此の如くあるが故に、先第一に、自然物の形からして、彼れが如きその一般的形の習慣、即ち運動及び構成の彼れが如き合種族的法則といふものが、取出され、さうして無規則的偶然性との連絡から離解せらるゝといふ事、第二には、右の如くある結果、形といふものゝ一の種族の構成法則が、偶然性、或は自然の活動が各個の見本中に於て作出する所の差異といふものを棄却して、直觀に供せらるゝといふ事に對し、何ものも妨をなさないのである。

更に又 彼れが如き形からして、漸次に、一般的の器械的合法性、終極には最も一般的なる器械的合法性が、

取出され、さうしてそれ自體として直観化さるゝといふ事に對しても、何等の妨げはない。

而も此等の事をするのが、茲にいふ「型相化」といふものゝ意義である。少くとも、此の語にして、狹義に解釋さるゝならば、此の如くある。

かゝる「型相化」とは、一部の學者が思認するらしいやうに、自然物體に對し、幾何學的整正や均齊の法則を「適用」するの謂ではない。之は、自然形に對して、整正や均齊を附加したり、又は之を強制したりするのを意味しない。此の如く、異質のものを結合するといふ事は、是自然物に壓迫を加ふるといふものである。樹木をして、特定の幾何學的形體、即ち球形や角錐形を取得せしむるやうに、之を切斷するといふ事は、右の如き事を唱ふる美學者の所思に基く型相化であらう。されど此の如くする事の中には、何等藝術的の行爲はなく、又何等の型相化もなく、單に非藝術的の蠻行が存する許りなのである。

此のやうな説に反對して吾人は言明せねばならぬ。型相化とは、一の附加作用でもなければ、又單一なる棄却作用でもなく、之に反し之は一の取出し作用であると。之は、否定でなくて、承認即ち藝術的承認作用である。之は強制の施爲でなく、之に反し解放であるのである。

二 型相化の可能

型相化とは、最も一般的の意義に於ては、藝術的目的の爲に、自然界中に存在せるものゝ單なる翻譯から離去する各の作用をいふのである。之は特に、自然事物中に存する本質的のものを直観化するの謂であつて、隨つて

事物に於ける本質的のもの、及びその本質に對し無價値なるものを、均しく取上ぐる事によつて之を寫取する作用の反對に立つものなのである。

併し此の如き型相化は、種々の方向に於て進み得る。何となれば、それ〴〵の事情に應じて、異なりたるものが、一の自然事物に於ける本質的のものとして現出し得るからである。さうして斯かる型相化は、又、自然事物の形や色にも關し得るのである。

吾人は、今此の所では、色を別に置いて置く。さうすると、型相化の二個の本質的に異なる方向といふものが生ずる。

第一に、型相化は、一の個體に於て、その個體に對し本質的なるもの、即ち特徴的のもの、或は之に於て個體的に顯著なるものを、興起強調したりする事が能きる。此の種の型相化をば、吾人は個體化的の型相化と呼ぶ。之が特殊の種類はかの戯畫である。

第二に、型相化は、一つの個體中に於て合種族的なるもの、並に合種族的に本質的なる所のものを取出し、さうして斯かる個體中に於ける特異なるもの並に固有の特徴的のものを棄却し得る。此の如き型相化は總括的型相化と呼ぶべくある。

されど又、合種族的なるものを取出すといふ事は、種々のものを意味し得る。第一に、かゝる「種族」といふ語が、狹義又は廣義に解釋され得る。之を例へていふと、人間の個體といふものは、農夫或は騎士といふ種族に屬する。同時に又、兩者は、各の場合に於て「人間」といふ種族にも屬する。かゝるが故に、此の個體を表現す

るに際しても、彼れが如き狹義の種族又は此の廣義の種族に於ける本質的のものが、強調し興起され得る。而も此等の差異に應じ、型相化は、甲若くは乙の方向に於て行はれる。更に又、此等の「種族」の各に於ても、一又は他のものが、本質的のものとされ得るのである。

併しながら、一の種族の範圍内に於ても、かゝる種族に對し特徴的なるもの、之が有する特異なるもの、即ちその「我意的のもの」が、個體化をなしながら強調さるゝ事も能きれば、又他の種族と共通的なるものが、總括をなしながら、取出し興起せられ得るのである。

三 總括的の型相化

茲では、形といふものゝ總括的型相化が叙述さるべくある。かゝる型相化は、特に、一の種族といふものゝ形の一般の構成法則といふものを獨立的の直觀に提供する。而も第一には狹義の種族の取上げ、第二には廣義の種族の取上ぐるのである。此の型相化は、各個の偶然性を棄却し、一つの種族の形の習慣、或は一一般の構成法則をば、獨立的に直觀化する事から成立する。

抑も、各個の個體の、一般の構成法則に違反する事とか、又はその範圍中に於て發展する所の偶然性とかいふものは、一般の自然連絡、並にその連絡がなす力の異雜なる活動中に根據づけられてある。又斯かる自然連絡の中に於ては不可避的にあるからには、茲にいふ總括的の型相化は、被型相化物をば、一般の自然連絡から分離せしむるといふ事を同時に前提するのである。此の逆に、此の如き分離をなすには、總括的の型相化が必要になる。凡て自然界に屬するやうに見え、此の中に投入されており、さうして斯くある結果、此の一部分であるべく要求する所のものは、亦此の如きものとして表現されねばならぬ。自然界の外に取出され、孤立せしめられ、それ自體として位置されてある所のものは、もはや自然連絡の一部であるやうな様子をしてはならぬのである。

之と同時に、容易く理解せらるゝ如く、分離された形の「自由」といふものが、變化するやうになる。之は、益々多く、己れ自身に放任された不羈なる自然物といふ意義に於ける自由ではなくなる。さうして己れ自身を「無拘束」に實現する所の器械的合法性といふ意義に於ける自由といふものに近接するに至るのである。

ところが此の種の型相化といふものは、益々深く進み行く事が能きる。さうしてそれが深く進めば進む程、益々多く、一般的の構成法則といふものが、自然界に於ける現象の最も一般的なる法則に近接する。換言すれば、吾人に直接に知得された最も一般的なる器械的法則に近接する。さうしてまさしく此の如くなると共に、自然形といふものは、幾何學的の形に近接し、最後には、全然かゝる形に迄轉化するのである。

之を例へていふと、吾人は、恐らく、一の樹木に對しては、彼の常規の外に轉轍せしむる所の外部的影響を吾人が離れ見る時に植物といふものが目指す所の一般的の形、或は正規形といふものを附與する。されど最後にはかゝる形は、純然器械的に可解的なる蕃薇形といふものになる。或は又、捲き上がる所の莖は、幾何學的の螺旋となり、纏繞する所の枝は、幾何學的の波状回轉となるのである。

終りに、吾人は言明する事が能きる。直線といふものも亦型相化された自然であると。之は、次のやうな一つの法則の型相化的分離、並に獨立的の直觀化である。その法則とは、自然界の到る所に於て、即ち人間の直立に

於ても、樹木の成長に於ても、將た石とか葉とかの落下に於ても、その他之に類するやうな現象に於て、最も一般的なる根本法則として實現されてある所のものなのである。

四 型相化の發展

以上の如く述ぶるとはいふものゝ、幾何學的の形又は裝飾的の形といふものが、始めに自然物を模倣し、さうしてそれからして歴史的に發達成長したといふ事を意味しない。一部の學者は、此の事を可信的になさうと試みた。彼等は、結極、たゞ一の自然形からして、あらゆる可能なる幾何學的の形又は裝飾的の形を導出したのである。

此の如き試みの中には、此の種の形の意義といふものゝ全然たる誤認が存する。一體、自然物の最も一般的なる構成法則をば、特定の形から読み出したり分離したりする爲には、吾人は既に、此の法則をば、吾人の精神的財産中に所有せねばならぬ。蓋し、本來読み出といふ事は、又読み込みといふ事であるからである。そこで此の種の最も一般的なる構成法則は、既に吾人により、自然界に於ける種々の形や現象の觀察、事物並に最後には吾人自らの身體を基とする經驗からして、抽象されてあらねばならぬのである。

されど吾人は、歴史的發達の右に對する逆の進路を信用してはならぬ。之に反し時間的に最始なるものは、その個別的構成に於ける具體的の個物でもなければ、又抽象性の一一般的のものでもない。此の反對に、シマツク圖型的のものであつて、即ち吾人の眼に偶然的に映じたる一般的の根本容狀の興起である。かの兒童が、石筆を以てその石盤上に描出する所の、僅少な線や點から成る人間は、之が代表物とも謂ふべきものである。

次に吾人は假定せねばならぬのであるが、此の如き圖型的のものからして、形といふものゝ歴史的發達は、二つの相互に反對せる方向に進むのである。即ちそれは、一方に於ては、個體的なるものゝ益々確實なる把握といふ方向であつて、他方に於ては、各個の形の中に與へられたる一般的の形上の合法性を純粹に取出すといふ方向なのである。

かくて、全體の發達行路といふものは、疑もなく、右の如く思念されねばならぬ。若しも此の發達にして、既に或る程度迄成功されたならば、進歩といふものは、各個に於て、抽象的の法則から、自然物の多様な個別的構成に進み、さうして斯かる個別的構成から抽象的の法則に迄進む事が能きる。かの描線遊戯なるものは、恐らく始めに於ては、まさしく描線遊戯以外のものではなかつた。ところが次になつて、分枝は植物的の分枝となり線の端は、動物又は人間の頭となる。或はかゝる端は、花の有様に構成される。又圓から蕃薇形が發生し、その他凡て此の如くある。更に他方に於ては、大なり小なり十全に自然物を模造した形は、順次に、抽象的の幾何學的の形に迄變化される。最後に、系統的に、自然物の形からして、構成法則といふものが、型相化をする事により、取得せらるゝのである。

第四章 空間的形の結合と分員

一 官能の分化

吾人は既に知得した。一切の空間的形といふものは、吾人に對し活躍的にあるといふ事を。かゝる形の中に於ては、運動及び働作、延長と制限、擴大と狹縮、分裂と内部的結合、向上と沈下、進行と運動の中止、終止と新奇なる開始、共同的働きと反對的働きなどが存する。此等のものは、吾人に對し、經驗、結極する所、吾人が吾人に對し、又は吾人自らの中に於て爲した所の經驗を基礎として、空間的形の中に於て起生する。同時に此等は、一切の可能なる具體的の各個經驗からしての抽象の産物である。而も此の種の内部的活躍性といふものは、形をして、美的に顯著にならしむるのである。

此の如きが故に又、一の空間的に多様なるものをば、美的統一體たるに至らしむる所のものは、いつでも、右の如き生活々動の統一的方法たるのである。

されど此の種の生活々動なるものは、多くの方面を有し、さうして幾多の異なりたる要素をその中に包有する次に、活動のかゝる方面或は要素が分裂し、さうして相互反對的に現出するといふ事は、分化といふ法則に一致する。若しも此のやうな分化にして、外界の顯現物中に於て直接に直觀的になさるゝならば、一の美的分化となるのである。

此の事に就いては、吾人は既に一般的に語つて置いた。併し今、かゝる分化に關し、稍詳密に吟味をなすべくある。此の際、再び、吾人の「一般の美的形式原理」をば、幾何學的形の美的内容に對し應用すべくある。吾人は、かゝる「形上の言語」なるものをば、特に建築の範圍に於て、一步進んで追究して見よう。

之を例へていふと、かの柱が支持をするを假定する。かゝる状態の中には、種々なるものが存在する。先第一に廣さの點に於ける分裂と集括とがあり、次に一の垂直的働作といふものがある。此の場合に於ては、柱といふものは、第一の分化、即ち、右の二つの方向に於ける分化を受くるのである。

之は一の「内在的」の分化である。それは、高さ上の延長と廣さ上の延長とは、柱に於ては、いつでも一緒に存するからである。けれども此等は、柱の外部的顯現に於ては、判明に分割されてある。此等の各は、それ自體として純粹に現出されてある。

之と同時に、柱に於て、第一の「君主的從屬」といふものが、起生する。それは即ち、廣さ上の延長が、高さ上の發展の下への從屬である。此の如き實例に迄、吾人は、容易く想起し得る如く、單一なる矩形に於て曾て説及された。之に於ては、同時に、從屬に於ける均衡の法則といふものが、成立し居つた。即ち、矩形といふものは、若しも從屬をなした次元が、從屬の斷乎たる印象と兩立し得る丈の程度に於て、自己を主張するならば、快感を起さしむるのである。

ところが茲に語り居るやうな實例に於ては、事實關係は異なる。即ち柱といふものは、豈に、二つ又は三つの方向に延長されたものであるのみならず、更に之は、一の全體といふものゝ一部であり、さうして全體中に於て

特定の作用を遂成すべくある。之は、全體に従屬する事により、同時により高遠なる合法性の均衡といふ法則の下に従屬する。此の如くして、一般的に、吾人の形式原理の各は、若し、もそれがより高遠なる形式原理、或はより高遠なる美的合法性に従屬するならば、效力を有しないやうになるのである。

吾人は今特に、柱の垂直的働作といふものを取上げて見よう。吾人は、柱が支持すると右にいうた。此の事は先第一に、之が直立するといふ事を意味する。此の中には、一の顯現、一の生成といふものが存在する。柱は、その眞直なる存立に於て生成する。之は垂直的働作によつて發生する。又相互に繼起する所の瞬間に於て發生する。さうして柱の生成といふものは、此等の相互に繼起する所の瞬間に於て、可觀的に分化をする。

之は、並列に於ける分化といふものである。かゝる分化は、分離された部分即ち各個の「歩武」に於ける分裂であるを要しない。されど此の如くなり得る。各の場合に於て、並列といふものは、同時に一の繼起である。それかというて又、之は、一の全然たる同時的存在である。柱といふものは、恰も吾人が直立的の位置に於て固執する場合に吾人を直立せしむるが如く、前に垂直線に關して吾人が言明したと同様の方法に於て、直立をする。吾人の彼れが如き固執は是進行的の發生である。柱の直立は、絶えず發出或は働きをなす所の力である。之により柱は毎瞬間毎に發生し、此の發生は、各瞬間に始まり、又各瞬間に完了される。

二 働作と反對的働作

凡て、働作即ち力の費消なるものは、反對及び反對的働きのなしにあらぬ。換言すれば打破されたり又は抵抗されたりする所のものなしにあらぬ。そこで、かの柱に於ては、重力の働きといふものが打破される。此の際假定されてゐるのは、柱が、此のやうな働きの經驗し之を受納するといふ事である。此の如くあるが故に、右のやうな活動性といふものは、各の一般的の活動性と同様に、一の受働性をばその中に包有するのである。

されど同時に、重力の働きといふものは、それ自體として考察すると、之とて亦、一種の「働作」である。之は柱の働作に迄附屬する反對的働作である。而も此の如く述ぶると共に、一の新奇なる内在的分化といふものが與へらるゝのである。その内在的分化とは、まさしく働作と反對的働作とに於ける分化であるのである。

又之と共に、新に従屬といふ疑問が發生する。曰く、二つの働作は相互如何に關係するかと。疑もなく、此の點に關しては、三様の可能が存在する。第一に、古代の柱に於ては、上から下への働きが、下から上に進む所の働作に迄從屬して居る。詳しくいふと、柱に於ける運動、換言すれば基本運動といふものは、上方に進み、さうして柱に於ける主要官能なるものは是直立といふ官能である。次に、重力の働きは、柱といふものが反抗して直立をなすといふ要素であり、之は打破さるべきものであるのである。

第二に、右の柱には、支持作用の反對の落下作用といふものが對立する。かの「ドリツク」の三堅筋繪様といふものは、一の支持物である。されど之に於ては、主要運動といふものは、上から下方に進む。即ち三堅筋繪様は屋根の線盤の重壓をば、軒縁に迄移植する。之は、二つの相反せる運動、即ち下方から上方への柱の運動と上方から下方への線盤の運動とが、會合して均衡を保持する所の點である。茲には、靜止的緊張の一の點が存する勿論右の三堅筋繪様も亦上昇するけれども、之は唯確實に、重壓の移植を媒介するが爲丈である。此の三堅筋繪

様なるものは、よしや各の點に於てではないといへ、尙机或は椅子の脚に比較すべくある所の「軒蛇腹腰石」である。之は、その上にある所のもの、随つて先第一に軒蛇腹に附屬する。此の故に、之は、玉縁ダイゼンにより軒蛇腹に結合されてある。さうして之は、こゝから下方に伸長する。此の状態は、恰も、机の脚が、机の集塊アストリガムから下方に、地面に向つて伸長するが如くにある。此の故に、此の場合に於ては、下方から上方への運動が、上方から下方への運動に従屬し居るのである。

最後に、第三の可能といふものは、次の如くある。即ち二つの運動或は働作が均衡を保持し居るのである。此の如き状態は、羅馬建築の或る支柱に於ける場合である。此の種の支柱は、上方と下方との間に挿入されてある之は、重壓に反對して上昇もしなければ、又重壓を地面に迄移植もしない。之に反し、上部と下部とを分離せしめ置く。

此等三可能の反對性といふものは、尙一層一般的なる意義を有する。そこで、空間的形體に於ては、各個に於ても又全體に於ても、到る所、二つの相互に反對せる働作の中の孰れが主要なるものであるか、或は吾人が他の場所に於て言明したるやうに第一次的のものであるか、或は又、兩者が、美的觀照に對し均衡を保持するかといふ疑問が起る。吾人は、「美的觀照に對して」と云ふ。何となれば、兩者が事實的に均衡を保持するといふ事は、さつでも自明であるからである。

次に吾人は、柱に於て、尙その水平的働作にも留意すべくある。此の水平的働作も亦、働作と反對的働作とである。即ち、柱は、水平の方向に於て延長し、さうして再び水平の方向に於て、己れ自身の中に集括をする。されど、此の際に於ては、いつでも、延長作用は集括作用に従屬して居る。即ち柱なるものは、己れ自身を延長する所の物ではなくて、己れ自身の中に集括をする所の物である。之は周圍に、即ち軸の方に於て、己れ自身の中に集括をする。かの垂直的の方向に於て、重壓といふものが、直立の働作によつて打破されると同様に、之に於ても、延長の傾向といふものは、集括の力により、打破される。或は之をより良く言明するならば、此の力により、制限を附せられる。その積極的動力たるものは、彼れに於て自己直立であると同様に、之に於ては集括作用である。積極的動力とは、換言すれば、主なる關係者、或は重視すべきもの、或は眞に意圖されてあるもの、即ち「第一次的のもの」といふ意であるのである。

さうして此の如くある事により始めて、吾人は、柱の廣さの、その高さの下への從屬といふものを理解し得る之は、集括の働作が直立の働作の下への從屬である。柱なるものは、軸に於て集括されてある所の垂直的働作を行ふ爲に、集括をなし、さうして軸の周圍に總方面的に集中をする。此の如き從屬は是直接的の奉仕、即ち役立ちといふものであるのである。

三 相互より發生する所の諸官能

由來柱の垂直的働作なるものは、單なる自己直立ではない。之は一の支持である。さうして斯かる支持の中には、如何なる事情の下に於ても、三種のものが存在する。それは、一には確固たる起立であり、二には直立であり、三には重壓の受納といふものである。此の際に於ては、一の分化といふものが、相互に繼續する所の獨立的

部分に於て起生し得る。さうして斯かる分化の遂行は、柱をば、一には基底、二には柱身、三には柱頭への分員といふものを生ずるに至らしむる。此等の三者は、判明に分離して現出する。それかというて同時に、共通のもの、即ち統一的の不分割なる根本思想といふものは、保持されある。けだし柱なるものは、右の三個の官能に於て順次に活動する所の唯一の個體である。即ち全體に行渡り、地面から上昇し、高所に迄進行し、さうして重壓に反抗して進む所の唯一の運動は、右の三個の要素に迄分員をされる。更に換言すれば、三個の凡ての官能といふものは、右の如き「根本思想」即ち統一的の官能に従屬をなすのである。

否此の如き分化は、尙一層進み行く事が能きる。即ち基底といふものも亦、三種のものを其の中に包有する。之は、一には、上方から、柱身を透して己れに加へらるゝ所の壓迫を受ける。二には、柱に反抗し地面によつて及ぼされたる反對的壓迫を受ける。之は兩作用を受けるが、併しそれは敢へて己れを潰滅せしむる爲ではなく、之に反し、兩者に反抗して己れを保持せんが爲である。第三に、之は兩者に對し、能働的の抵抗をなす。

此の如き三種のものは、「アツチック」基底即ち礎石に於ては、一には波狀列形、二には尖小形、三にはもう一つの波狀列形といふ三者の中に於て現出される。此の際に於ても亦、此等三種の官能となつて唯一の働作といふものが遂成される。さうして吾人は、此等の統一性の直接的印象を有する。即ち此等三個の官能に迄分裂する所の共通的のものゝ印象を得るのである。

柱や基底の凡て此等の分化といふものは、是内在的の分化なるものである。同時に之は、並列及び繼起に於ける分化である。即ち柱に於て各個の官能の繼起が起生するのである。

されど吾人は、尙一瞬間、兩種の分化の中の前者、即ち柱全體の官能の、基底、柱身、柱頭の諸官能に迄の分化に立止つて、攻究して見よう。

柱なるものは、此等各個の官能の繼起する事により、發生する。之は、此等官能が、各瞬間に於て相互から起生する事により、發生する。諸官能は、之丈の限りに於ては、既に言明せる如く、繼起的のものである。けれども又、之は、之と同程度に、同時的のものである。

されど吾人は既に知得した。柱の働作なるものは、反對的働き或は反對的働作なしにはあらぬといふ事を。ところが、斯かる言明は、柱の支持作用を構成する所の各個の官能に關しても成立する。そこで、此等の各官能は、それ自體の中に於て働作及び反對的働作である事になる。

さうして此の如き反對的働作も亦、柱の中に於て、相互から繼起する。たゞ反對の方向に於ける許りである。詳しくいふと、重壓の働きは、柱頭に於て始まる。之は恰も、重壓に反抗しての自己直立の働作が柱頭に於て終止するが如くにある。さうして又、右の重壓の働きなるものは、柱身中に於て連續し、さうして最後に、基底によつて受納し、且つ全然打破せらるゝのである。

同時に、兩種の考察法といふものは、各の部分中に於て結合をされる。即ち、柱頭は、それが受納する所の重壓を支持し、柱身は、重壓の働きに反抗して己れを直立せしめ、基底といふものは、支持さるべき重壓に關して確固たる足場を作出するのである。

されど最後に、此等三個の部分に於て遂行せらるゝ所の、並列及び繼起に於ける分化なるものは、同時に、並

列に於ける一の從屬であるのである。けだし柱全體といふものは、或る方法に於て基底中に於て統括され、さうして之は、他の方法に於ては、柱頭中に於ても統括される。或は此の中に於て「凝縮」をする。此の際「凝縮」或は從屬といふものは、一の客觀的の從屬である。換言すれば、柱の中に感じ込まれる結果、柱そのものの中に存在する所の、官能の從屬である。即ち基底に於て、全體の官能、換言すれば確固たる起立の官能といふものは、「客觀的に」統括をされる。而も此の如き官能は、是全體の柱の司るべきものである。けれども之は、基底により、特殊の方法に於て企圖される。けだし基底なるものは、常に起立するのみならず、更に全體の柱も起立する。ところが、全體の柱の此の如き起立は、特殊の方法に於て、基底に於て起生するのである。

さうして之と同様に、柱頭といふものは、特に、柱の支持或は重壓の受納を表現する。此の場合にも亦、全體の柱が、重壓を受納し之を支持する。けれども斯かる支持は、柱の中に於て統括凝縮されてある。或は又、柱といふものが、その支持をなす限りに於ては、統括凝縮されてあるのである。

最後に吾人は附言せねばならぬ。柱が、柱頭及び基底に從屬すると同様に、之は、柱身にも從屬する。柱身といふものは、それ自身の中に、特殊なる方法に於て、柱、即ち全體的柱の自己直立を表現する。随つて、全體的柱の官能も、此の柱身の中に於て「凝縮」されてあるのである。

此の如くあるが故に、結局、柱といふものは、その部分の各のものに從屬するやうに見ゆる。かくて各の部分は統配者となる。此の如きは可能である。何となれば、實際に於て、柱でなく、之に反し、いつでもその唯一つの方面が、三個の成員の一中に於て統括されてあるからである。吾人にして、若しも柱をば、三個の官能の統一體と假定するならば、既に言明したるものが成立する。曰く、かくあるとすると、部分の各は、全體に從屬する。或は全體に奉仕すると。此の際に於ても亦、奉仕といふものは、十分なる意義に於て受取らるべくある。即ち、それは、意志の從屬と解釋さるべくある。蓋し、柱全體といふものは、一の意志的個體である。唯それが此の如くあるが故のみで、會述したるものに基き、之は、全體として、同時にこゝそこにあり、又茲ではかの様に、かしこでは此の様に活動し得るのである。之に關しては、本書の第八章を参照すべきである。

兎に角、活躍的統一體或は個體の以上の如き共同的働きにより、全體的有機體といふものは發生する。かの建築的の全體なるものは、何人の説理に據るも、一の此の如き有機體である。而もかゝる有機體といふ語は、若しも全體に於て活躍的なる意志及び行爲といふ思想を缺くならば、全然空虚なるものとなるであらう。

四 同時の共同的働き

かの柱に於て、基底と柱身と柱頭との繼起中に於て與へられてあるが如き、並列に於ける分化なるものは、吾人が既に言明せる如く、同時に、一の「繼起」に於ける分化である。即ち各個の部分或はその官能は、「相互から發生する」のである。ところが、此の如き繼起的分化の外に、並列に於ける分化の尙他の可能なる種類、即ち同時の分化なるものが存するのである。

本來柱なるものは、各個的のものとして官能しない。柱の列中の各の柱は、各自その役目として線盤を支持する。されど之は次のやうな事を意味しない。各の柱が、己れの力だけにて、總線盤の一個の部分又は一個の片を

支持し、かくてその隣りの柱には、己れと無關係に同様の作業を仕遂げしむるやうに一任するといふ事を。此の反對に、凡ての柱が一緒になつて、或は統一體として、線盤を支持する。かくて凡ての柱の中に、各個の個體に迄分配せられ、それかというて之が故に尙統一的にある所の唯一の行爲といふものが存在するのである。

ところが此の種の事をば、吾人は唯意志的個體の中に於てのみ認知し得るのである。試みに、意志の唯一個の働作に基く、二つの脚の上に於ける起立、兩腕の展開、五本の指を以ての一つの物體の把握などを思念すべきである。此の如きが故に、並列し居る柱の官能といふものは、美的觀照に對しては、右と同種類にして且つ種々の同時的働作に於て實現せらるゝ所の行爲といふものとなる。而も又、此の如くある事により始めて、柱の列が、吾人に對して人間的になり、その結果美的に可解的になるのである。

之をより精密に云ふと、柱の列なるものは、唯一個の個體の司る所である。随つて又、柱の列なるものは、唯一個の個體である。但しその此の如くあるといふ事は、かゝる一個の列が、多くの個體に迄分離するといふ事を妨げない。

されど、多くの個體に迄分員された集合的個體の此の如き統一的の行爲に於ては、統一的行爲が分配せらるゝ所の個體、或は總個體が分離して生ずる所の個體なるものが、相互に同一であるといふ事を要しない。此の如き個體は、質的に分化せられ、さうして合法的に變化する事が能きる。試みに「ゴチック」の外壁、並に方柱に迄のその分化、及び上部に興起する破風を有する所の、介在せる穹窿筋違骨を思念すべきである。或は又、若しも隅の支撐物が方柱、中央のが圓柱として形成せらるゝ場合に現出する所の、支撐物の列の質的分化を思念すべきである。

五 相互的の働き

柱の列中に於ける幾多の柱の並列には、右に語つた所の、官能の相互的發生といふものが對立するのみならず更に、種々の官能の相互的働きといふものも對立する。さうして、柱の中に於て相互から發生する所の諸官能が空間的に繼起すると同様に、此の相互的働き、即ち相互に對して働く所の働作も、空間的に繼起する所の成員に迄分配せられ得る。此の場合に於ても亦、此の相互に對して働く所の働作が、相互の中に交渉し入ることを廢罷しな。

之を例へていふと、「ドリツク」建築に於ては、上部結構と下部結構、支持的部分と重壓的部分との明瞭なる反對が存在する。而もその此の如くあるといふ事は、下方から上方への運動と上方から下方への運動が、全體として到る所共存してあるといふ事を妨げない。そこで、「ドリツク」柱なるものは、常に上方への運動であるのみならず更に下方への運動でもある。さうして「ドリツク」の線盤は、下方への運動であるのみならず、又上方への運動でもある。たゞ、前者たる柱に於ては、上方運動といふものが主要なるものであり、後者たる線盤に於ては、下方運動が主要なるものである許りである。

ところが、種々の成員に於ける、相互に對して向注された働作の此の如き分化は、その十分なる發展に於ては、常に二分割を生ずるのみならず、又三分割をも生ずる。即ち相互に對して働く運動は、中央の部分に於て會

合し、此等は此の所に於て均衡を保持するのである。

此の如き部分は「ドリツク」建築に於ては、軒縁である。軒縁の必要といふものは、おのづから判明する。けだし、空間的に分割された官能の反對及び相互的働きにして、より大に且つより顯著であればある程、此の如く分離と組合とをなし且つ比較的比較的にそれ自身の中に静止し居る成員といふものを、益々多く要するやうになるのである。更に又、前に語つたやうな柱の三分割及び「アツチツク」基底の三分割といふものも、此の如き見地、即ち相互に對して働き、中央に於て會合しさうして茲で均衡を保持するといふ見地の下に立つのである。

尙その外に、此の三分割の原理といふものは、空間的分員の範圍に於ては、一層進みたる意義を有する。けだし、一には發生したり、又は發生したりするやうに見ゆる所の凡ての限畫された形といふものが、發端と中央と終點とを有するといふ事、詳言すれば(一)發端状態、運動の確固たる出發點、一の基礎、礎石、(二)次には、運動の進行、隨つて形體の固有の生成、その發達或は伸展を表現する所の部分(三)完結、運動の静止點との三者が右の形の中に於て區別し得べくあるといふ事は、かゝる形の本性といふものである。而も此等三個の要素は、いつでも、之に該當する所の分員といふものを要求する。それから、發端及び終點の特殊の種類は、鳴り込みと鳴り止みといふものであつて、之に關しては、後になつて尙一度説述する事にする。

第五章 均衡と運動

一 空間的の均齊

吾人は、右に於て「ドリツク」の軒縁をば、均衡の點と稱した。けれども之は絶對的意義に於て斯くあるのではない。即ち之は、絶對的の静止點ではない。之は、下方から上方への運動に於ける一つの點である。之は、此の如き運動に對しては、通過點である。軒縁なるものは、此の如き一方的に向注された働作の爲に、その存在を有する。或はその場所に於てある。之は、此の如き働作によつて發生された全體の中に於て始めて、——副貳的に——均衡の點として現出する。之に繼起し此の上に興起する所のは、之から發生する限りに於ては、その重力の爲に、之に反抗して復歸的に向注し、さうして前行する所の運動に對し、均衡を保持する。

されど、此の如き比較的均衡の點、詳言すれば同在して而も先第一に特定の方角に於てかゝる點を通過する所の運動といふものゝ中に於ける均衡の點には、絶對的均衡の點、即ち絶對的の静止點なるものが、對立する。かゝる静止點に於ては、反對の方角を有する兩働作が、相互に對し、同種なる働作であるといふ事が、前提されてある。同時に、此等は、量的に相互に對し同一であらねばならぬ。而も此の如き均衡といふものは、均齊といふものに於て發表せらるゝのである。

本來、均齊なるものは、その性質上、空間的範圍に迄、限制されてある。之は、一の中點から反對の方角への、

或は、反對せる方向から中點への、同一なる自己發展であるのである。して又、何故に、均齊といふものが空間的の範圍に於て可能であるかとの疑問に對しては、先第一に次の如く解答される。曰く、左方と同様に右方、下方と同様に上方に向注するといふ事は、是眼といふものゝ性狀の致さしむる所であると、或は之をより正しく解答すると、次の如くなる。曰く、一點に迄向けられた注意に對し、全然同一なる方法に於て、その右と左とに存在するものが、一緒に把握に提供せらるゝ事、恰も、空間的にそれの上及び下にあるものが、一緒に把握に提供せらるゝが如くあるといふ事は、是同時的に與へられたる空間的のものゝ性質の致さしむる所である。

而も此の如く述べると共に、同時的のものが、時間の中に於て繼起する所のものと、本質的に異なる點は、直接に表示せらるゝのである。吾人は勿論、一つの時間上の點から、前方並に同時に後方に注目する事が能きる。けれども此の場合には、前のものは以後のものと同様の方法に於て、把握に提供されない。一體、此の如く同時に前方及び後方を注目するといふ要求は、是質的に反對し相互に角逐し且つ比較的に相互を除却するといふ把握作用の方法に對する要求であるのである。此の事に關しては、吾人は後になつて再び復歸する。

二 均齊的分員

右の如く述べるとはいふものゝ、吾人は尙暫時の間、空間的の均齊に立止まつて推究して見よう。すべて、一の空間的の多様なものが、相互並列的に與へられてある場合には、之をば、一つの點から、反對の方面に觀照し、隨つて、中央から反對の方面に各個の元素を統覺的に受納するといふ事は、吾人の心性の致さしむる所である。或はかゝる受納をなすべき傾向が、吾人の中に於て存在する。此の如くある事により、此の場合には、かの質的一致の法則なるものが、一種の力を取得する。そこで、吾人にして、一の多様なものをば、右の如き方法に於て把握するならば、然る時に、吾人の中に於て、兩方面に於て、同一のものに對接し、隨つて把握作用に對し同一の内容を取得せしめようとの需要が存立する。多様といふものにして、若しもそれ自らの性狀の爲にかゝる傾向に迎接するならば、そは吾人をして快感を起さしむるのである。

されど、兩方面に於て同一のものを把握しようとの斯かる傾向に對しては、更に、同様の方法に於て把握しようとの傾向が、同時に結合する。詳言すれば、吾人が中央から相反對せる方面に於て對接する所の同一のものをば、同様の方法に於て統覺し、集括し、區別し、整序し、分員しようとの傾向が結合するのである。そこで、吾人は、尙暫くの間、特に此の第二の點に留意して見よう。假りに、可能的に單一なる空間的のものが同時に與へられてあるとする。例へていふと、點の列が、眼に提示されると假定する。次に、先第一に、此の列が、三個の點から成ると假定する。かゝる場合には、三個の點をば、中央から觀察するといふ事は、吾人に取り自然的である。同時に、又、吾人の中に於て、此等の點を一の統一體に迄集括し、さうして斯かる統一體をば、中央の點に於て尖出せしめようとの傾向、或は凝縮せしめようとの傾向が存立する。

此の如きが故に、吾人は、此の中央の點に迄、他の二點をば、同一の方法及び同一の程度に於て、從屬せしめようとする。又之と同時に、中央の點を強調しようとの傾向が、直接に與へられる。

さうして吾人は、此の種の中央の點が客觀的に強調されてある、換言すれば之が何等かの方法例へばその大小により、興起されてあると假定する。かゝる場合には、此の點は、より高度に目に着く。而も此の事は、同時に意味する。之が、己れをば、統配的の元素になし、さうして他のものを己れに従屬せしむるやうに要求するといふ事を。

されど客觀的所與の此の如き要求は、前に述べた吾人の自然的傾向といふものと、調和する。さうして此の種の事情は、客觀的所與をば快感的のものとなるに至らしむるのである。

次に吾人は、右の點が、より大なる事物、例へば一の建築の三個の部分に迄變改されると假定する。さうすると、中央の結構が興起し、さうして同一なる側面的結構が、右と左とに於て連結するやうになる。此の如き排列も亦、客觀的に要求されたものと、自然的なる主觀的需要との調和の爲に、快感を起さしむる。蓋し、中央結構の興起といふものは、之をして注意をより高度に己れの方に向くやうにならしむる。此の故に、此の中央部分は統配者、即ち全體といふもの、統覺的重点であるべき要求を提起する。さうして斯かる要求に對しても亦、彼れが如き方法に於て統括し從屬せしめようとの自然的傾向が、調和する。此の故に、興起する所の中央結構と退減し居る所の側面的部分とを有する全體といふものは、快感的のものとなるのである。

併しながら又、三個の元素の中の第一と第三とを中央のものに迄從屬せしめようとの右の如き傾向の外に、之に反對する種類の從屬の傾向といふものも、存立する。即ち、かの二つの側面的元素なるものは、發端と終點とであり、さうして斯くあると共に、之は、其の外圍に對しては新奇なる或るものである。然るに中央の點といふ

ものは、列の中に於て「消失」せしめられる。即ち吾人は言明する事が能きる。之は、第一の點から第三の點への道程中に於ける單なる通過點である。而も此の如くあると共に、寧ろ第一の點と第三の點とを強調し、さうして此の兩點に迄、中央の點を從屬せしめようとの傾向が與へらるゝのである。

さうして此の場合に於ても亦、吾人は假定する。客觀的事實關係といふものが、右の如き自然的傾向と調和するといふ事を。換言すると、第一と第三の元素がより大であり、隨つてより高度に目に着き、その結果全體中に於て統配をなすべく要求すると假定する。さうするといふと、客觀的に要求されたものと主觀的需要のと斯かる調和からして、客觀的の所與に對する満足の感情といふものは發生するのである。

最後に、之に關しても亦、吾人にして、點をば建築部分に迄變改するならば、然る時には、何故に、啻に、退減し居る兩側面的部分間の興起する所の中央結構が快感を起さしむるのみならず、更に此の逆に、興起し居る側面的部分間の退減し居る中央結構、即ち二個の同一なる塔の間の入口などが、快感を起さしむるかを、理解し得るのである。

次に吾人は、元素の數をば、四に迄増加して見る。かゝる場合には、直に理解し得る如く、二つの中央の元素が、第一と最後のものとの下への從屬といふものが優勝する。此の時には、その下に從屬をなし得べき中央の元素といふものは存立しない。同時に、此の如く、二個の中央の元素が、發端的元素と終止的要素との下への從屬といふものは、唯一個の中央の元素が發端的元素と終止的要素との下への從屬といふものから、性質的に異なつて居る。今や中央の元素は、同一の方法に於て、二つの外方的元素に迄、結合されてあらぬ。之に反し、主とし

て、第二のものは第一のものに迄、第三のものは第四のものに迄、結合されて之に従屬し、さうして副貳的方法に於て始めて、第三のものが第一のものに迄、第二のものが第四のものに迄、從屬をなすのである。同時に第二と第三の元素は、全然同種といふ事の爲に相互に結合されてある。さうして之から發生する所の統一體といふものは、右の最初に述べたものよりも、より散漫なるものである。

それから、吾人にして、若しも四個の元素に對し第五の元素を附加するといふと、關係は異なつてくる。此の場合には、中央の元素が亦存在する。即ち第三の元素は、系列の中央點を表示する。さうして此の如き中央點を統覺的の中央點となし、隨つて第三の元素の下へ他の元素を從屬せしむるといふ事は、吾人に取り自然的にある。されど此の如き中央點の下には、直接に唯第二の元素及び第四の元素のみが從屬し、第一と第五の元素は、之に對し遠隔に存在する。此の故に、中央點に對し此等二つの元素を獨立せしむべき傾向が、特に存立する。さうして斯かる傾向中には、第一及び第四の元素をば、此の如き二つの終點的元素に從屬せしめようとの傾向が、同時に内在するのである。

されど、此の際に於ても亦、二つの相反對せる可能が存在する。その一に於ては、中央の元素が、全體の固有の統配的の點であり、同時に全體がより少き程度に於て、兩端の元素に從屬するのである。次に他の一に於ては兩端の元素が固有の統配的の點であり、さうして中央の元素が、第二位の統配的の點である。孰れの場合に於ても、五個の點なるものは、從屬といふものを二重の段階に於て起生せしむる所の一の系統を構成するのである。ところが、此等凡ての場合に於て、吾人は均齊的の觀照と分員とを行ふのである。此の如き觀照及び分員は、

吾人に取りて自然的にある。さうして之が故に、觀照された事物にして、若しもその性質上、此の種の均齊的の觀照及び分員を要求するならば、快感を起さしむるのである。

三 系列の分員

吾人は今、右に關する状態を變改して見よう。そこで、三個又は四個又は五個の元素が、それ自體として與へられてなく、之に反し、此等の代りに、任意なる長い系列が與へられてあると假定する。由來吾人は、此の如き系列をば、その種々の部分に於て均齊的に觀照する事が能きる。換言すれば、吾人は、並列的に位置せしめられた諸點を取出し、之に對しその兩側面の外周をば、同様の方法に於て統覺的に附加するのである。

此の際、吾人は二つの場合を區別し得る。第一には、系列が客觀的に幾多の群、例へていふと、各三個から成る群に迄、分離される。換言すると、第三元素の後に、毎回一の分割成員或は中間成員が挿入される。かゝる場合には、吾人は數回、前に語つたやうな三元素の均齊的把握といふものを、並列的に實行するのである。

第二に、吾人は事實が右の如くなく、之に反し、系列といふものが平等一様に進行するものであると假定するかゝる場合には、吾人は、系列を構成する元素の何等客觀的の差異が存在しない丈の間は、任意に、三個單位五個單位等を取出す事が能きる。さうして吾人は、此の如く取出した群をば、上に區別したやうな二つの相互に反對する方法に於て、整序し分員をなし得る。併し此の如き方法は、相互に平衡をなす。隨つて此の中の孰れも實現されない。されど、特定の元素が、その性状により顯著になると假定する。例へていふと、各の第二元素が客觀的に強調

されんとする。此の場合には、吾人は、此の第二元素の下に、第一と第三の元素を従屬せしむる。同時に吾人は、第三元素をば、第四元素に從屬せしむる。之を簡言すると、各の強調されない元素、即ち吾人の注意をより少き程度に要求する所の元素といふものは、兩側面の方に從屬する。さうして此の如くあるよりして、一の統覺的組織といふものが、發生する。そこで、強調された諸元素といふものは、強調されない元素により、相互に結合せらるゝのである。

此の如き統覺的組織は、若しも系列中に於て、各の第三元素が客觀的に顯著になり、或は何等かの工合に、より重要に現出するならば、異なりたる性質を取得する。今や第三の元素に對し、第四及び第五の元素が從屬し、而も第四の元素は直接に、第五の元素は間接に從屬する。同時に、第五の元素は、直接に第六の元素に從屬し、第四の元素は、間接の方法に於て、隨つてより少い程度に、第六の元素に從屬する。隨つて此の場合にも亦、凡ての元素が相互に組織される。されどより散漫なる方法に於てある。之を換言すると、より散漫なる統覺的全體が發生するのである。

或は又、各の第三元素が、客觀的に顯著になり、それかというて此等客觀的に顯著なる元素の中で、毎回、第二元素が、より高度に強調されると假定する。かゝる場合には、種々の段階の從屬が發生するのである。

併し吾人は、此の點に關しては、此の上の深入りをなさない。蓋し、吾人が右に語つた所の組織なるものは、先第一に、統覺上の組織である。之は、吾人の把握作用に對しての相互的附加、結合、綜織なるものである。けれども此の如き吾人の行爲といふものは、同時に、系列の中に「感じ込まれる」。而も此の種の感情移入作用により、系列といふものが、かういふ一の形態になる。その形態とは、己れ自身をば、己れ自らの内部的働きの爲に均齊的に分員し、規則正しく繼起する所の點に於て、兩側面から、より緊密なる均齊又はより散漫なる均齊に、己れ自身の中に集括をなすといふものである。系列なるものは、實に、此の如き官能或は働きの帶有者となる之は、此のやうな活躍的の内部的運動、一點に於ての合法的に繰返さるゝ集括、彼れが如き自働的なる均齊的分員及び組織、並に之により點から點に迄作出された内部的均衡等の爲に、發生し、さうして存立を保持する所の全體といふものである。

四 質的に分化された系列の分員

吾人が、右に語つた所の全體といふものゝ分化は、是量的のものである。けれども之は進んで質的のものになり得る。凡て系列の全體中に於ては、到る所に次の兩者が存在する。それは一方に於ては延長或は伸展であつて他方に於ては集括である。さうして此の如く性質上相互に反對する官能が、並列的に且つ空間的分割をされて實現せられ、かくて此等が此の際統一と内部的の交互的働きとに於て存留するといふ事は、是自然的の事である。此の事は、若しも、更代的に、系列の一つの元素が伸展し、他の元素が己れ自らの中に收縮するやうに現出するならば、起生する。今や到る所に存する延長と集括とが、自延長作用と集括作用との韻律的更代に迄變する。さうして諸元素といふものが一の統一體を構成するからには、此の如き延長及び集括は、是全體といふものゝ官能として存立する。たゞ此等の異なりたる官能が、更代的に、異なりたる成員に於て表現されてある許りである。

而もかくあると共に、官能の反對性といふものは、直接的に直觀的になり、さうして全體は、之迄よりも一層高度に、直接的の直觀に對し活躍的になるのである。

一つの系列の此の如き内部的活躍性をば、更代的に、延長し且つ收縮する所の成員から成るかの玉縁といふものが、表示する。若しも延長といふものが、かゝる玉縁の根本的官能として現出するならば、然る時に之に於ては、延長された成員が、全體といふものゝ官能の固有の帶有者である。收縮された成員は役立ちをなす。此等は右の延長に對し、その確固たる支撐を與へる。此等は、延長された成員に從屬し居るやうに見ゆる。

玉縁の此の如き質的分化に於ても亦、より緊密なる結合或は綜織と、より散漫なる結合或は綜合との、二つの可能が存在する。第一に、相互的に繼起する延長された諸成員は、いつでも、唯一の收縮された成員により直接に相互に對して結合される。第二には各の二個の延長された成員の間に、二個の收縮された成員が存在し、かくて兩側面の方への各の延長された成員に、收縮された成員の一が直接に從屬する。されど延長された成員に對し、かゝる成員の第二のものが從屬する限りに於ては、此の場合にも亦一の綜織が存立するのである。唯之が、より散漫なる綜織である許りである。之は、全體に於て、より輕易にして且つより自由なる運動である。即ち可動的の連絡であるのである。何人も、玉縁といふものゝ此等兩種の構成法を知得し居る。

五 均齊と均衡

以上に於ては、吾人は、完結的に繼續せる元素の均齊的分員から出發した。かゝる分員からして、吾人は直に特定の元素が他の元素に均齊的に從屬し居るといふ、任意に延長された系列の均齊的分員に迄進むべくある。此の兩場合の差異といふものは、一に於ては、均齊的の觀照が唯一回であるのに、他に於ては、同時或は順次に、多くの場所に於て之が遂行せらるゝといふ事であるのである。

されど此の第二種の均齊的分員に於ては、同時に、次のやうな點に留意が促がされた。それは、均齊的の觀照が、如何にして己れ自身の中に活躍的であつてさうして己れ自らの内部的働作により己れ自らを均齊的に分員するものとしての系列の觀照に迄變化するかといふ事である。

ところが、此の第二種の觀照のみが、美的觀照である。詳言すれば、系列といふものが、吾人によつて均齊的に觀照せらるゝのみならず、更に均齊的に活動しさうして之により己れ自ら均齊を保持するものと現出する事により、之が美的價值隨つて美の性質を取得するに至るのである。此の如き均齊のみが是美的均齊である。

而も斯かる言明は、各の均齊に關して成立する。かの、三個の元素のそれ自體として存する所の繼續とても、若しも全體といふものが、己れ自らを均齊的に展開し、さうして中央或は終端の成員中に於て集括し、かくて均衡を取得するならば、美的觀照に對し、均齊的に整序されある事になる。此の場合に於ても亦、此の如き自動的の均齊、並に之より發生する所の客觀的所與の内部的均衡といふものが、美的に快感を起さしむるのである。

されど、吾人は特に、此の如き均衡の美的意義に留意して見よう。一般の内部的働作と同様に、客觀的所與が内部的働作によつて與ふる所の此の均衡も亦、吾人により感じ込まれる。之は、客觀的のものゝ中に感じ込まれたるもの。即ち、吾人により直接に體驗された吾人自らの均衡である。吾人は、吾人の中に於て、詳言すれば吾

人の身體的行爲及び態度中に於て、或は、吾人の思想、何等かの目的に迄向注された吾人の意志中に於て、かゝる均衡を發見するならば、又は吾人が何等かの工合に、一の確固たる點から反對の方向へ同一の方法に於て吾人を活動せしむるならば、或は又、吾人の活動の相反對せる方法の一つの點に於て集括する等の事をなすならば、然る時に、右の如き均衡が吾人に對し何を意味するかを知得する。さうしてそれが此の如くあるが故に、又此の如くあるが故のみで、右の均衡を發表し居るやうに見ゆる所の形、その中でも均衡的の形が、人間的になり、隨つて美的に可解的且つ快感的になるのである。

ところが、何時、一の空間的の形體中に於て、相反對せる働作が、右に假定したやうな方法に於て均衡を保持するか、換言すれば一つの絶對的の靜止點に於て集括され得るかといふ疑問は、既に一般的に、次の如き方法に於て解答された。曰く、それは、反對の方面から中央に於て集括さるゝ所の働作が、相互に均しくある時、隨つて中央に於てその中性點を有する所の同種の働作又は運動が、中央から、反對の方向に分散する時、或は此の如き働作又は運動が、反對の方向から、中央に於て會合し、さうして茲で均衡を取得する時であると。

併し今や更に進んで、空間的働作の如何なる形或は方法が、それ自體として、又は、此等が一つのより廣大なる全體の中に於て取得する所の位置の爲に、事柄の性質上、以上の如き觀照法を許容するか、或は之を要求するかといふ疑問を起さざるを得ない。

かゝる疑問に對しては、「以上の如き觀照法は、主として、水平的に展開せるものに對して適用さるべくある」といふ解答が、發生する。之は同時に意味する。均齊的の構成なるものは、先第一に水平的方向に於て可能であるといふ事を。蓋し水平的運動なるものは、それ自體としては、同種の運動である。之が、中央から、右方に進むか、又は左方に進むかは、何等質的の差違を生ずるに至らしめない。

之に反し、垂直的運動なるものは、自然的の質的反對に立つ。即ち下方への運動は、重力に服従し、上方への運動は、重力に抵抗するのである。

されど、其の此の如くあるといふ事は、垂直的の均齊といふものゝ存在を妨げない。但し此の際、重力といふ思想は、均齊的の形體自身中に於ては、取去られてあるといふ事が、前提されてある。さうして、此の代りに、上と下との間の、延長運動といふ思想、單なる伸展、進行、分離或は結合といふ思想が、浮出されて居る。而も此の如くある事により、垂直的運動といふものは、水平的運動と同價値のものとなる。さうして之が水平的運動と同價値である限りに於ては、垂直的、均齊の可能といふものも存立する。此の如くして、かの柱と雖も、均齊的に構成され得る。之は、既にそれ自身の中に於て確固として居る組織の部分を伸長する事がその任務である以上は、此の如くあるのである。

此の逆に、水平的運動といふものは、質的に異なりたるものであり得る。かゝる場合には、之は同時に、均齊的構造を拒絶する。かの固定せる壁から伸展する所の袖は、壁への方向に於ては、壁からの方向に於けるよりも全然異なりたる官能を有する。即ち、壁への方向に於ては、壁と交互的働きをなすのに、壁からの方向に於ては自由に終止する。此の故に、此の如くある場合に於ては、均齊といふものゝ存する餘地は無くなるのである。

六 運動に於ける均衡、弾力性

右の如き方法に於て一つの事物といふものが、均齊的の觀照を拒絶する場合には、均齊的觀照の代りに、前に第一に語つた所の他種類の觀照が現出する。それは即ち、一端から他端に迄生成する所のもの、或は經過する所のものとしての、全體といふもの、觀照である。

されど吾人が既に知得せる如く、此の種の觀照には、尙他の一種の均齊的觀照法、即ち、一點から反對せる方向への觀照といふものが、内屬し、且つ從屬する。吾人は、「ドリツク」建築をば、先第一に、軒縁から觀照しない。之に反し、その最下端から最上端に迄觀照する。されど吾人は、之をば、副貳的方法に於て、右の第一種の仕方のやうに觀照する。即ち吾人は、かゝる建築に於て、下方から上方に發生してさうして建立をなし、それかというて同時に、下方及び上方から軒縁に對して働き居るといふ一の全體を觀照するのである。

併し、一方的に向注された觀照の下に此の如く均齊的觀照が從屬するといふ事は、他の所にも起生する。さうして之は、無限的に多くの程度に於て起生し得る。之を例へていふと、吾人が曾て、斷乎と直立する所のものと稱した所の古代の柱は、同時に、大なり小なり均齊的觀照の對象である。之は、その中央から、上方及び下方に働く。之と同様の言明は、「アツチック」の礎石に關しても、成立する。若しも此の如き副貳的の均齊的觀照が起生する場合には、相反對せる働きの均衡といふものが存立する。たゞ之が、同一なる働きの絶對的の均衡でない許りである。隨つて此の如き働きの、形といふもの、何等の均齊が對應しない。

茲に語つた所の均衡といふものは、空間的に分離し居つて、一點から出發し若くは一點に迄向注する所の官能といふもの、均衡である。尙その外に、均衡の概念なるものは、空間的形の範圍に於て、最も一般的なる適用を發見する。吾人は知得した。各の空間的の働きの、一の反對的働きの對應し、さうして空間的形體といふものは、いつでも、兩者の均衡の爲に己れを保持するといふ事を。殊に、此の如き均衡といふものは、どこでも、與へられあつて相反對的にあり、さうして己れ自身を進透せしむるといふ官能の均衡であるのである。

ところが、此の如き均衡の中に於ても亦、二種の可能が區別さるべくある。それは、一には、均衡が到る所に存立するといふ方法であつて、二には、之が吾人の眼の前に可觀的に發生するといふ方法である。此の第二の場合に於ても、かゝる均衡が各の瞬間ごとに發生するからには、之と同程度に、各の瞬間に於て事實的に與へられてあるのである。

吾人は今、均衡の右の如き發生をば、吾人の眼前に於ける發生と稱した。而も此の「眼前に於ける」といふ語は重視すべくある。かの直立する所の垂直の直線に關しても、それに於て一の均衡といふものが「發生する」といふ事を言明し得る。此の直線は、發端的瞬間に於て特定の直立の力といふものを有する。かゝる力は、重力を打破するが爲に、消耗される。若しも、向上する所の力と重力の力にして「均衡」を取得するならば線は終止する。此の故に、之に於ては、均衡の状態といふものが、線の發生中に於て生成されたのである。

ところが、均衡の此の種の發生といふものは、吾人が茲に就いて思念し居るものではない。かゝる發生に於ては、均衡を取得する所の二つの力が、始めから存立し居る。即ち、均衡なるものは、一の力が他の働きのより比

較的に消滅せしめらるゝ事により、發生する。或は、吾人が述べたやうに、他の力の働きを打破するが爲に比較的に消耗せらるゝ事により、發生する。而も均衡の此のやうな發生は、吾人の眼前に可觀的に起らないのである。併し、此の如き可能の外に、尙他の可能が存在する。それは、一つの力の進行的働きにより、他の力が順次に發生するといふ方法である。此の種の可能は、吾人が既に知得せる如く、彈力的の形體に於て實現されてある。即ち、かゝる形體に於ては、一つの力の順次の働きにより、一の新しい力が發生する。此の逆に、一つの力の此の如き發生を起さしむるやうに見ゆる所の形體は、彈力的のものと現出するのである。

ところが此のやうな形體に於ては、同時に、均衡といふものは、此の語の特殊の意義に於て發生するのである。さうして均衡の此の如き發生は、吾人の眼前に於てせらるゝのである。

七 能働的の弾力性と受働的の弾力性

一つの力の以上のやうな「彈力的」の發生に於ても亦、二種の可能が、相互に對立する。吾人は先第一に、一つの空間的形體が、己れ自らの一の働作を實行し、さうして斯かる働作の順次の進行中に於て、異なつたる方向に於て働く所の、一つの力の發生するのを見る。第二には、吾人は、形體といふものが、己れに對して及ぼさるゝ所の、一の働きに對して屈服し、さうして屈服する事により、右の働きに對する抵抗の力を取得するのを見る。彼れに於ては、形といふものは、能働的に現出し、之に於ては受働的に現出する。されど孰れの場合に於ても、形は彈力的に現出する。

此の如くして、「アッチック」礎石の「尖小形」或は「缺首」といふものは、吾人が之をば、下から上への方向又は此の逆の方向に觀察しようとも、その軸に對しての内部の方に順次に向注し、さうして之と共に、軸の方向に於て絶えず増加する所の働作といふものを發生せしむる。之に於ては、確に次の事に留意すべくある。彼れが如き運動は、直接に、此の垂直的働作を發生せしめない。之に反し、之は先第一に、絶えず増加する所の水平の内部的緊張を發生せしむる。そこで、尖小形、詳言すれば益々深く進行する所の水平的狭縮といふものは、反働的働き、即ち延長の傾向、或は始めの廣さに迄復歸の傾向を喚起する。さうして此等兩者の間の緊張といふものは、それ自身からして、垂直的の運動を發生せしむるのである。此の際、先づ内方への運動は、彼れが如き絶えず増加する所の反對的働きの爲に、始には急激に、次には緩徐に起生する。最後に、働きと反對的働きの間に最高の緊張の點が生ずる。此の如き點は是分岐點である。かゝる點からしては、形體は始めには緩徐に、次には急激に、その始めの廣さに迄復歸する。かくて全體といふものは、延長的働作と狹縮的働作との間の一定の均衡を表現し居る所の始めの廣さからの脱出と、其の廣さの彈力的の回復とであるのである。

かゝる尖小形の對立的形相をば、かの「波状形」といふものが表示する。之に於ては、一の形體が、重力に屈伏しながら、己れ自身の外に脱出し、さうして此の際、絶えず増加する所の集括の傾向、或は始めの狭縮への復歸の傾向、隨つて又益々強くなる内部的緊張といふものを發生せしむる。之に於ても亦、運動といふものは、——之は今延長運動或は流出であるのである——始めには急激に、次には緩徐に、一の極點に到達し、さうして復歸をなす。之により、吾人は、一つの全體、即ち屈服する事によりて彈力的に己れを集括し、さうして益々

確實なる抵抗に對する力といふものを取得するといふ全體の形相を受納する。かくてかの缺首といふものは、働作に對する彈力的緊張の形相を與ふるのに、波狀彫形なるものは、彈力的屈服の爲に行はれた抵抗の形相を與ふるのである。

彈力的起生の此の如き二種の方法も亦、吾人に對して美的意義を有する。何となれば、吾人はかゝる方法をば、吾人自らの體驗から知悉し居るからである。吾人は、彈力的の力の緊張をば、例へば身體的運動に於て知悉する。さうして之と同様に、吾人は、彈力的の屈服、即ち順次の緊張に由る抵抗能力の取得を知悉する。更に吾人は、此の如き彈力的行動の特別に快感的なるを心得居る。而も此の如くあるよりして、該當するそれ〴〵の形が、その美を取得するのである。

自働的彈力性並に受働的彈力性の此の如き動機といふものには、他の形、例へば純然たる線の形に於て、吾人は接觸する。かの圓は、その性質上彈力的にあらぬ。然るに、螺旋、渦卷飾、渦形は此の如くあり、古代の渦形に至りては、事實的に此の如くある。又彈力的の螺旋に對しては、吾人は本書に於て前に言明した所のものに、指示をなし置くのである。

八 以上の外の曲線的の形

曲線的の形なるものは、彈力性に關する直接的の印象を與へ得る所の唯一のものである。何となれば、斯かる形のみが、他の運動から一の運動への力或は傾向の恒常的發生を直接に感官化し得るものであるからである。されど同時に、圓といふものゝ實例が最も判明に指示するやうに、各の曲線的の形が彈力的であるのではないのである。

此の如き彈力的でない曲線的形といふものは、單一にして隨つて直線的なる運動に對し、之に垂直に向けられて他の運動が加はり、さうして各の點に於て毎回之に對して働く事により、發生する。此の如き力の連續的働きといふものは、右の運動を繼續的に轉向せしむるのである。

此の如くして、音に右にいふやうな形が發生するのみならず、更に又、例へば建築に於て、垂直的運動を水平的運動に迄、或は此の逆のものに迄、絶えず移行せしむる所の形が、發生する。

此の種の動機とても亦、その特有の美的價値を有する。之は、かゝる價値をば、吾人自らの體驗からして取得する。吾人は、此の動機が何を意味するか、又吾人に受納せらるゝ特異なる感情の如何にあるかをば、次のやうになすならば、知了し得る。それは、吾人が、始めに一つの方向に於て吾人を運動せしめ、さうして次に急動して、一の新しい方向に移行せず、之に反し、一つの方向に於ける運動をば、恒常的に他の方向に於ける運動に迄移行せしむる場合であるのである。

九 鳴り込みと鳴り止みの動機

アイレンゲン アウスクリンゲン

かの尖小形に於ける如くに、自由に開始して異なりたる方向を取り居る所の運動から、一の運動衝動、又は一つの運動的の力、更に進んでは事實的運動の恒常的發生といふものは、よりて以て新に生ぜられた力が活動する

といふ運動の「鳴り込み」と稱する事が能きる。此の際、力を生ぜしむる所の運動は、いつでも、始めの均衡状態の外へ自由なる脱出といふものである。

此の如き「鳴り込み」には「消失」といふものが對應する。それは、彼れが如き運動が、均衡状態に迄復歸し、さうして之と共に發生された力が消滅する場合である。之に對する單一なる實例は——彼れが如き「尖小形」の發動及び結局の外に——柱身といふものゝ發動及び結局である。之に於ても、尖小形に於けると同様に、順次の水平的狹縮により、垂直的動作、或はかゝる動作の増進といふものが、喚起される。此の種の動作或はその増進は、その仕事が行はれた後には、終止し、今や弛緩といふものが現出する。そこで吾人は、狹縮された柱身といふものが、その上端に於て、再び始めの廣さに迄復歸するのを見るのである。

且又、此等二つの動機といふものは、一のより廣大なる意義を有するのである。先第一には、鳴り込みの動機である。吾人はかゝる動機に、到る所大仕掛け及び小仕掛けに於て、遭遇する。即ち、到る所に於て、一の空間的の形、或は全體的形に於ける一の運動、或は行動の方法といふものは、後續する所の運動を可能にし、之を豫備し、之に對する力を發生せしめ、又は之が實行を誘起する。此の如くして、柱の基底に於ては、柱の運動といふものが、鳴り込みをする。さうして最後に、より廣い意義に於て、一の壁の臺或は「ドリック」建築の平臺に於ける展開及び確實なる集括といふものは、壁或は「ドリック」建築の垂直的運動の鳴り込みとして表示する事が能きる。之と同様に、消失といふものも、最も種々なる形に於て起生する。特に上記の如き「結局」といふものゝ中に存在する所の消失には、「鳴り止め」といふものが、並列せしめらるゝ事が能きる。鳴り止めとは、一つの運動が、

進行して、一の妨害或は反對的に働く力例へば重力に打勝つたが爲に、己れ自身の中に消滅するのをいふのである。吾人は、之に關しては、先第一に、一の終結點の向ふ側に於ける鳴り止みに迄想到する。一の終結點とは、一の運動が阻止せられさうして本質的に靜止するといふ點なのである。けれども此の運動が全然靜止されないといふ事は、正しく結果として、之をば此の點の向ふ側に於て鳴り止みをなすに至らしむるのである。

之を例へていふと、建築に於て、軒蛇腹に於て阻止し終結せしめられ、それかというて、全然その上の進行力を奪はれて居ないといふ垂直的運動なるものは、寄棟とか、圓形とか、簡言すれば飾縁の向ふ側に於て同一の方向に經過し、さうして其の終點に於て運動の絶對的終止を直觀に供するといふやうな終末的形體中に於て鳴り止みをなす。かくて鳴り止みをなす所の下方運動のもう一つの實例を擧ぐるならば、「ドリック」の三堅筋繪様に於て、下方に迄、軒縁に對して進行する所の運動といふものは、截頭圓錐線に懸垂し居る所の截頭圓錐の中に於て鳴り止みをなす。之と直接に比較し得べきものは、總とか櫻とかいふやうな、限制する所の縁の向ふ側にある組織の延長的力を鳴り止ましめ居るものなのである。

此等の形に於ては、いつでも、一の反對的働きによつて靜止せしめられた運動が、反對的働きの點の外側に迄進行し、かくて己れ自身の中に消滅をなすのである。此の運動を最後の終止せしむる爲には、何等の新奇なる反對的働きを要しない。之に反し、いつでも運動を己れ自身の中に帶有する所の反對的働き、即ち内部的禁止、痲痺の自然的傾向といふもので、十分するのである。

けれども、垂直的運動の「ゴチック」式の鳴り止めは、之と全然同種類のものではない。之に於ては、運動に對

し、斷然停止を命じ、さうして有力なる反對的働きをなして、その上の前進に抗拒する所の固有の終結といふものは、起生しない。よしや鳴り止み以前に比較的の靜止點といふものが、缺損しないにもせよ、尙かある。此の反對に、運動は、靜止點によつて比較的の阻止されずに、前進を續ける。けれども前進する中に於て、集塊は減少し、さうして之と共に、力の貯蓄も減少する。今や上方に進行する所の集塊の部分、特に方柱といふものゝ漸次の釋放が行せられ、之により、釋放された部分に於て、上方への進行力は減少し、かくて、若しも部分が、繼起的に、即ちそれが釋放されるに連れて、隨つて外部から内部への進行中に於て、鳴り止みをなすならば、それは自然的に見ゆるのである。此の種の鳴り止みといふものは、植物の部分に於ける運動の鳴り止みに均しくあるのであつて、此の運動は、植物の幹或は莖から、順次に釋放せられ、さうして消失し、最後に、幹或は莖も、細小になり、之と共に、その最初の力を失ひ、かくて完結に到達するのである。

十 謂ふ所の「句讀點」

インターフンクチャー

一つの全體といふものゝ總官能が分解されて發生する所の個々の官能にして、益々多く分化しさうして獨立化せられ、隨つて、全體が、比較的の獨立せる個體及び部分的個體に迄益々多く分離される程、益々多く、一方に於てはかゝる獨立性或は個體性の承認を要し、さうして同時に、他方に於ては、此等がよりて以て遂行せらるゝ所の比較的の獨立せる官能或は形といふものゝ可觀的の結合を要する。此の如くあるよりして、分割的成員及び結合的成員、全體の形態の形態の言語中に於ける小と大との空間的の「句讀點」及び「小辭」が發生するのである。

同時に、此の種の分割的成員及び結合的成員といふものは、いふ迄もなく尙他の意義を有するのであつて、此の意義の事に關しては、既に本書の外の所にて説示し置いたのである。そこで、かの相互に獨立し居る成員は、同時に、分割的成員の方に向つて相互に働く、或はかゝる成員から反對の方向に働く。試みに、尙一度、「ドリック」建築の主要なる句讀點たる軒縁といふものを想起するがよい。小仕掛けに於ては、「アッチック」礎石の部分を分割し且つ結合する所の小縁並に之に類似せる形體が、右と同一である。此等に於ては、いつでも、分割的部分と結合的部分とは、同時に、均衡、靜止、總運動の中に於ける確實なる固執の點として現出する。

小縁或は小橈なるものは、それ自身の中に於ける、硬固なる靜止點である。此等は、此の如きものとしては、最も自然的に、彈力的の成員の間に適入する。之に反し「小棒」なるものは、彈力的の靜止點である。此の如きものは、特に硬固なる形の間に入るべきものである。此の種類の適入に於ては、此等の中間的成員といふものは、同時に、硬固と可動、單一なる存在と内部的活躍との間の反對性の相殺に迄役立つのである。

空間的の全體的形態の各個の形に關する右の如き簡單なる説示が、今此の所にては、十分であらねばならぬ。之以上のものは、是各個の空間藝術の美學の司る所であるのである。

録文

明治三十二年三月三十一日
東京市山王町三丁目三〇八〇番
東京市山王町三丁目三〇八〇番

同文館

大正
大正
大正



明治三十二年三月三十一日
東京市山王町三丁目三〇八〇番

東京市山王町三丁目三〇八〇番
東京市山王町三丁目三〇八〇番
東京市山王町三丁目三〇八〇番
東京市山王町三丁目三〇八〇番

東京市山王町三丁目三〇八〇番

